
テリトリープリンセス

リープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テリトリープリンセス

【Nコード】

N3168Q

【作者名】

リープ

【あらすじ】

仁村藍子の好きになった人。ごく普通に優しい人。

でも、彼には他の人とは違う体質があって……触れたい、でも触れられない。

意識すればするほど離れていく。今日も吹き飛ばされてしまった……でも、負けない！ 彼と正々堂々と手をつないで歩くために。

第1話 「あと三メートル五十センチ」

「好き」

たった一言伝えるだけで、少女にとっては大事件、命懸けだ。十代少女にとっての決闘の場、それが告白現場である。

ここ、向坂高校にも命懸けの女の子がいた。体育館裏などと、呼び出されただけで「告白されるんじゃない？」と期待させるベタな場所を選び、少女はか小さき体で戦に挑もうとしていた。

胸に手をあて、伏目がちに前方をうかがっている。心音が頭の中で響き、口の中が乾きながらも、舌で唇を軽く舐めて、なんとか話しかけようとしていた。

やがて意を決し、ゴクリと生唾を飲み込むと第一声を発した。

「立浪裕人君」
たつなみひろと

ううっ、なぜにフルネームで呼んじやったの私？

少女は心の中で自分に突っ込みを入れる。

名前を呼ばれた張本人は「はい」と返事した後、頬を人差し指でかきながら話しかける。

「なんの用かな？」

わざとらしい。と、客観的に見れば思うかもしれない。

だが、立浪裕人と呼ばれた男の子は眉をひそめて口は一文字。困ったような表情を浮かべている。

極めて情勢は少女に厳しい。

「えーっと、えーっと……」

少女は呼び出したにもかかわらず、告白の雰囲気になれようとしていた。今にも泣き出しそうな表情だ。

なにか話さなきゃ！　じゃなくて、今日は告白に来たんだよ！　言わなきゃ。伝えなきゃ。もう後悔したくないっ！

少女は軽く息を吸い込むと、瞳に力を込めた。

「わ、私は三組の仁村藍子にむらあいちって言います！ ええっと、ええっと…
…以後よろしく願います！」

自分の名前を言い切った後、藍子は勢い良くお辞儀をした。

「え？ はあ、こちらこそよろしく」

裕人もつられてお辞儀をした。二人のお辞儀は、戻すタイミングを失って、しばらく頭を下げたまま数分間続いた。藍子は心の中で頭を抱えた。

違——うっ！ こんなことが言いたいんじゃないよ。確かに名前は覚えて欲しいけどなにやってんの私。頑張れ自分！ ここまできたらもう退けないよ！

勢い良く頭を振り上げると、顔がすっかり上気していたが、気にしないで藍子は言葉を続けた。

「わた、わた、わた…しと…」

「綿？ 使徒？」

「違います！」

「はい！」

「好きです！ 私と付き合ってください！」

言葉を言い切った瞬間、藍子の脳内ではシャンパンファイトが開始された。さまざまな藍子が押し合い圧し合いでお互いの健闘を称えあった。やったー言えた！ 言えた！

しかし、長老っぽい格好をした脳内藍子が手で制する。「まだ返事を聞いていないぞよ」と。

我に返った藍子は裕人の反応をうかがった。彼の表情は赤面しているわけでも、状況が飲み込めず固まっているわけでもなかった。

ただ斜め下を見つめ、苦笑を浮かべているように見えた。

裕人の態度に藍子はお腹の底から冷たいなにかが湧き上がってく

るような感覚に襲われる。どこにも捕まれないような感覚。なにか言葉を繋がないては、という衝動に駆られた。

「あの、やっぱり駄目ですか？」

しばらく斜め下を見ていた裕人だったが、小さく頷くと藍子と視線を合わせた。

「いいよ」

「え？ ……本当？」

「うん。お付き合いしましょう」

ええええええええっ！ 脳内藍子たちは一斉にざわめき、お互いを見つめあった後、一気に感情を爆発させた。私、歴史的な勝利っ！

「やった——っ！」

「仁村さん、聞いてくれる？ ただし、条件があつて……」

すでに藍子は裕人の言うことを聞いていなかった。嬉しさのあまり、裕人の手を握り、何度も握った手を振った。

「本当だよ？ これって本当なんだよね！ なんて言ったらいいの？ ああ、もうわからない！」

藍子の両手に包まれた裕人の手。彼は間近にいる藍子を意識すると顔が一気に赤くなっていった。

「仁村さん、だ、駄目だよ！ 手なんか握ったら——あっ」

「——っ！」

裕人が言葉をいい終わらないうちに藍子は目の前からいなくなった。正確には吹き飛ばされ、彼の数メートル後ろで倒れていた。

彼女は何が起こったから分らず、寝転んだまま呆気にとられている。

少し離れた場所で裕人がため息混じりに話を続けた。

「今頃かもしれないけど、付き合う条件は三メートル五十センチ以内に近づかないことなんだ」

「嘘？　嘘だよ。本当だけど嘘だよ……」
気が動転したまま藍子はどう言のように呟いた。

第2話 「プリンセスタイム」

十一月。だんだん朝が寒くなって起きるのが辛くなるこの季節。向坂高校へ向かう生徒は皆、一樣に辛そうな顔をしている。理由は高校の立地条件に由来する。学校自体が山を切り崩して作られているので、校舎までには長く緩やかに続く坂を上らなければいけないのだ。

もちろん仁村藍子も例外じゃない。

でも、彼女にとってはこの坂は苦にならなかった。それは前方に立浪裕人を見つけたからである。彼女はポニーテールを弾ませ駆け足で近づくと、ある一定の距離で歩調を緩める。一、二回深呼吸をすると、少しお腹に力をいれ声を出した。

「おはよーっ！ 裕人くん！」

「おはよー！」

藍子の挨拶に驚く様子もなく裕人も大きな声で返事をする。三メートル五十センチ離れたまま歩く二人。だがお互いにとっては普通の行動であった。

「裕人君！ 今日の一時限目なにー！？」

「数学っ！」

「……お前らそんな挨拶してて疲れないか？」

二人のやり取りを聞いている裕人の友達、彦野悟ひしのさとるが藍子と裕人を交互に見てため息をつく。

こんな事をして、もう一ヶ月になる。

藍子からの告白で裕人と付き合うことになった。しかし、裕人の厄介な体質のためにお互い、近づくことが出来ない。

彼の体質とは『好きだと意識した人に対して結界のようなものを無意識に張ってしまう』というもの。彼が藍子に言った付き合ってた

めの条件『三メートル五十センチ以内に近づかないこと』というのは「近づかない」ではなく「近づけない」の間違いなのだ。

実際、藍子は何度も近づこうとしたが、その度になんらかの妨害を受け、弾き飛ばされる。まるで、磁石のN極とS極のように。

原因は全く不明。噂では未確認飛行物体に連れ去られたからとか、謎の怪人組織に誘拐されて改造手術を受けたとか、色々だ。本人も良く分からないと言う。

そんな訳で今日も二人は距離を取って、他の人より少し……いや、かなり大きな声で会話をしているのだった。校内でも彼の体質は有名で、二人のやり取りを不審がって見るものは誰もいない。

「それじゃ裕人君！ また後でねっ！」

「うん！」

裕人が一組の教室へ入ると、藍子は二年三組の教室へとむかった。

彼女は自分のクラスに入ると真っ先に井端環いはたたまきの元へ駆け寄る。

「タマちゃん！ 今日全然近づけなかったよぉ！」

「……嫌なら別ればいいだろ」

環は机においてあるノートパソコンのディスプレイを眺めながら素っ気無く言う。

「そんなの嫌だよ！」

「裕人の体質のこと知ってて付き合ってたんだろ？ だったらイチイチ泣き言をいうな」

「ふえーん、タマちゃん」

「あー、もう、うっとうしい！！」

抱きつく藍子とそれをはねつける環、二人の日常の姿だ。

会話だけでは藍子の方が幼い印象を受ける。しかし、実際は藍子は身長が百六十三センチ、環は百四十八センチで藍子の方が頭一つ大きく、見た目では違和感がある。

抱きついて離れない藍子にウンザリした環は一枚の紙を彼女の前

へ差し出す。

藍子が紙を受け取ると眉を八の字にして不思議がっている。環はため息混じりに説明した。

「私なりに立浪裕人の体質を考えてみた。参考になるかどうか分からないが、読んでも損はあるまい」

「タマちゃん、ありがとう!!」

環はあまり他人とは関わりを持つことがなく、モノの言い方も棘があるので、友達は少ない。しかし、言葉遣いの割には結構友達想いな環を知っている藍子は彼女の事が好きだ。

「おおっ!」

「どうしたのタマちゃん!」

「こんな所にお宝動画がアップされてるっ! 速攻、保存だ!」

「タマちゃん。学校にまで来てネットするのは止めようね」

「これが楽しみで生きているんだ。邪魔しないでくれ」

そんなこんなで時間が経過し、授業も終る。皆が一日の終わりを感じる時間。

だが藍子にとってはこれから勝負なのだ。

「今日の日の入りは十六時四十五分……だから……逆算すると……ああ、もう時間が無い!!」

急いで帰りの準備をすると駆け足で教室を出る。息を弾ませて待ち合わせ場所の校門へたどり着くと、すでに裕人が待っていた。

「裕人君、待った?」

藍子は走った勢いのまま三メートル五十センチ以内へ足を踏み入れる。

「全然、少し前に着いたばかりだから」

踏み入れた足はそのまま進み、藍子は肩が触れ合うぐらいに裕人に近づく。

「あー、良かった」

しかし、今回は弾き飛ばされる事は無い。藍子はまじまじと裕人を見つめる。彼の瞳の中に自分が映っていて、まるで独り占めしているような気分になった。

「えへへへ」

「どうしたの？ 仁村さん」

「なんでもないよ」

彼が近くにいる。それだけで幸せだったが、藍子は「待った？」

「全然」なんていう会話が出来るのも二人が付き合っている証明になる気がして嬉しかった。

「じゃあ行こうか」

藍子は黙ったままうつむいた。裕人が覗き込むと恥ずかしそうに視線をそらした。

「仁村さん、どうしたの？」

「あのね……今日は手を繋いで帰りたいなあ……なんて」

覗きこんだ裕人は赤面して一歩後退する。藍子は胸元に両手を持つていくと持ち無沙汰に自分の両手を絡めた。

告白の時には勢いあまって手を繋いだが、あらためて繋ぐとなると照れてしまうのだ。

「裕人くんが嫌なら諦めるけど……」

「いいよ」

裕人の言葉に藍子は顔を上げ瞳を大きくして表情を明るくさせる。彼が手を差し出すと藍子は恐る恐る胸元の手を伸ばし、手を握る。二人は手を繋いで歩き始めた。

実は日の入りまでの約一時間は裕人の結界が無くなる時なのだ。

黄昏時……誰彼時……誰か彼か分からなくなる時……人々が恐れるこの時間を藍子は一番楽しみにしている。彼女にとってはこの時

間は黄昏でも逢う魔でもなく、お姫様と王子様が出会える時間であった。藍子は「プリンセスタイム」と人知れずよんでいる。

第3話 「オレンジな占有的空間領域」

西日が二人を優しく照らす。川縁を歩く二人を取り囲む全てが水面の反射でオレンジに染まり、幻想的な雰囲気醸し出していた。

「裕人君。なんか夕暮れっていいよね。私好きだな」

「僕も好きだよ」

「ねえ、なんで夕日ってオレンジなのかな？ 暖かみのある色でなんだか包み込んでくれそうな優しさを持ってるよね」

まるで裕人君みたいと言いかけて藍子は止めた。あまりにもキザだし、恥ずかしかったからだ。

「夕日がオレンジや赤く見えるのは太陽光の角度が日中に比べて低いから、大気の層が厚くなって波動の短い光りが吸収されるからなんだって」

裕人君、そこは別に真剣に説明しなくていいよ。藍子は心の中で苦笑した。どうして男の子って真剣に説明してくれるんだろう？

今は雰囲気大切にしたいだけに。もう、裕人君の馬鹿。藍子は急に繋いでいる手を大袈裟に振って裕人を戸惑わせた。

「あー、もうすぐ日が沈んじゃうね」

何気なく藍子は言ったつもりだった。しかし、裕人には重い言葉となる。

「ごめん。僕の体質のせいで」

「ち、違うよ。裕人君を責めるつもりで言ったんじゃないよ」

「僕にも原因がよく分からなくて……」

いつも、この話題になると申し訳なさそうに俯き歩く裕人を藍子はあまり見たくなかった。

とはいえ、一ヶ月過ごして付き合っているとは程遠い生活に藍子は悩んでいた。

平日は授業があるので苦にならない。せいぜい今のよう夕方の時間だけ一緒に歩いて帰るぐらいだから。

しかし、土日になると元々彼に近寄れない事実が余計に突きつけられる。デートだってままならない。映画に行っても席を空けないといけないし、食事だってファミレスやレストランなんかでは食べることができない。せいぜい川辺で大声をあげて話すぐらい。つまり、平日と変わらない。

それでは考え方を変えて夕方に濃厚な時間を過ごせばいいのでは？ となるが、二人とも奥手なので手を繋ぐことで精一杯。まさに蛇の生殺し状態だった。

これを解消する方法はないのか？ 藍子が出した結論は至ってシンプルだった。

「私、決めたよ」

「なにを？」

大きな瞳を裕人に向ける。夕日によってオレンジになった裕人の顔に笑顔を投げると藍子はゆっくりと告げた。

「裕人君の体質を治すために……戦うね」

「戦う？ どうって？」

裕人が首をかしげていると、藍子は「てってて」と効果音を口で言いながら、鞆から一枚の紙を取り出す。紙にはびっしりと文字が書かれてあった。

「今日、タマちゃんから必勝法を伝授されたから」

「タマちゃんって、あのいつもノートパソコンを持ってるあの子？」

それに……必勝法って？」

「まだ、内緒」

藍子は少しだけ舌をだして肩をすくめる。自分でもベタ無な仕草だなあと思うが、好きな人の前だどいついついやってしまう。やはり好きな人には可愛いと思われたいのだ。

裕人はオレンジに染まる藍子の顔と可愛い気な仕草に少し照れて視線をそらしてしまう。

「仁村さん、あんまり無理しないで。こうして夕暮れは会えるんだし」

いつもこの言葉で藍子は安心する。今まではそれでもよかった。でも、今は違う。彼女は繋いだ手に力を込めた。

「ありがと。でも、もっと近くにいたいから頑張る」

「わかったよ」

それ以上二人には何も会話がなかった。というよりは会話は必要なかった。ただ、並んで歩く事がこの二人にとって特別なことだから。

やがて日が暮れると繋いだ手は離れていった。

家に帰った藍子は仏間へ向かい、線香をあげると手を合わせた。「お母さんただいま。今日も裕人君と一緒に帰ったんだよ。告白して本当に良かったよ」

家に帰ると二年前に死んでしまった母親に手を合わせて学校のことを話すのが日課になっていた。

日課を済ませ、自分の部屋へ入ると早速環から貰った紙を鞆から取り出す。

A4の紙にはびっしりとプリントされた文字が詰まっていた。タイトルは『立浪裕人についての考察』。早速、文章に目をやると冒頭に『立浪裕人の体質はパーソナルスペースの肥大が原因だと思われる』と書かれてあった。

「パーソナルスペース？」

意味が良く分からず、藍子はさらに読み進める。

『パーソナルスペースとは自分自身が持つ占有的空間領域の事で…』

「意味がわかんない……」

藍子はテレビを見ていても話しかけるような女の子だ。今回もご多聞にもれず、話しかけていた。さらに環は藍子の癖をも見抜いていた。

『などと書いても藍子には分からんと思うので分かりやすく書く』

「さっすが、タマちゃん。我が心の友よ！」

『例えばガラガラの電車で他の人とくっついて座る人はいないだろ？ それは席が空いてるから、自分が心地よいと感じる他人との距離をとれるからだ』

「確かに映画館とかでもなるべく他の人と一つ二つ席を開けて座るしね……」

『普通の人間ならこの空間は物理的に存在しないが、立浪裕人の場合はパーソナルスペースが顕現している』

「ふーん。つまり、裕人君は私との距離をとりたいから近づけないのかな？」

『パーソナルスペースは人間関係で変わる。家族や友人だったら一メートル前後、嫌いな人や見知らぬ人だと一説には三メートル半ぐらいの距離をとりたいらしい』

「え————っ、嫌だよ！！　じゃあ私のこと嫌いってこと？」

藍子は完全に紙と会話をしていた。これは環の文章のなせる技ともいえる。鼻息荒く、藍子は続きを読み進めた。

『しかし、裕人の場合は誰にでもパーソナルスペースが現れる訳ではない。好きだと意識した人間にのみパーソナルスペースが有効な事に注目しなければいけない』

「よかった。……って、全然何の解決にもなっていないよう」

さすがの藍子もここまで裕人の体質の説明にしかなくなってない事に気付いた。しかし、次の文章を見て息を呑んだ。

『パーソナルスペースを縮める方法は……』

「何、なに、ナニ」。教えて！」

彼女が待っていたのはこの部分なので、文字を読むのにも力が入る。紙が少しシワになってしまった。

第4話 「男の子ってこういうの好きでしょ」

環が渡してくれたA4の用紙。そこには裕人の体質についての考察が書かれていた。

藍子がさらに読み進めると、彼の体質への対策の記述を発見した。持っている紙にも力が入る。紙には以下のように記述されていた。

『一説には短時間で数多く接点を持つことらしい。長時間では駄目。ただ、これにはかなり長期間を要する。コツコツと家族的な愛に昇華させれば、自然と距離も縮まるだろう』

「うーん。やっぱり時間掛かるのか……」

藍子は肩を落とした。若い彼女には長期戦で物事を考えるということは苦痛でしかない。その点を見越して環の文章には続きがあった。

『どうせ藍子に待つ事を説いても無理なので、私が考えた結論を書く。それは……』

「ちよつと待って、ドキドキするからお茶を飲ませて!」

藍子はコップに入ったお茶を一気に飲み干すと、再び紙へ集中する。

『それは意識を最大限にまで肥大させて無力化させることだ』

「肥大? 無力化?」

『意識する感覚を麻痺させるのだ。例えるならば、サーバーへ一気に大量のアクセスをすることでシステムをダウンさせる要領だ』

「後の説明は分からないけど、裕人君にもっと私を意識させれば良いわけだね」

パソコンのことはちつともわからない藍子はなんとなくのイメージで物事を判断した。環に言わせると藍子の魅力の一つらしい。

「でも、具体的にはどうすれば……」

腕を組んで悩みだす藍子。しかし、紙にはまだ続きが書いてあったので、まずは読むことにした。

『ここからは自分で考えるのが一番だが特別に私がいくつかの例を書いておく。参考にしろ』

「さすが、タマちゃん!!」

環のアドバイスを元に彼女はその後、次の日のために徹夜した。

次の日。

向坂高校の長く緩やかな坂を上る生徒達。皆、一様に寒さと坂道でしかめっ面で歩く……はずだが今日は少し様子が違っていた。

「裕人くーん!!」

藍子を通るたびに皆が驚きの目を向ける。大声で呼ぶ彼女にいつもなら誰も気にしないのだが……

今日は事情が違った。

「あ、藍子ちゃん。おは………」

裕人は振り返った格好のまま凍りついた。

黒のニーソ、白のペチコート、フリフリレースのミディアムエプロンに紺のミニスカートのワンピース。胸元には可愛いリボンが付いていて、極めつけは頭についているレースつきのカチューシヤだった。誰がどう見てもメイド服。

「どどどどどーしたのその格好!」

口をあぐりと開けて、藍子を下から上にと視線を移す。

いつのまにか裕人と藍子の周りに人だかりができてつつあった。

「あの、あんまり見られると恥ずかしい!……かも」

「ご、ごめん!」

状況が飲み込めないまま、裕人は藍子に背を向けた。「ああっ」と声をあげ、藍子は裕人へ呼びかける。

「でも、やっぱり見て欲しい！……かな」

裕人は正面で向き合うことができず、半身の体勢でチラチラと藍子へ視線を向けた。

「で、でも、なんでメイド服を着てるの！？」

すると藍子は顔を赤くした。さらに軽く拳を握った手を口元に当てて、腰をよじらせてしなをつけた。

「男の子ってこういうの好きでしょ」

囲んでいる生徒達から一斉に声が上がる。一際興奮している生徒が感極まって叫んだ。

「明らかに間違った解釈をしてる！　しかし！！　イイ！！　いいよ！！」

叫んだ犯人は裕人の隣にいた彦野悟だった。拳を振り上げやたら興奮している。どうやら彼にはツボだったようだ。一方の裕人は藍子を直視できない。

環のアドバースは立浪裕人の属性を掴み、欲望を直撃する事だった。例としてメイド、妹、スク水（スクール水着）、巫女など色々挙げられていた。根っからのネット人間である環らしい発想である。

環チヨイスを信じつつも、その中で比較的無難なメイド服を藍子は選んだ。ちょうど文化祭でメイド喫茶をやったこともあって衣装が間に合ったという事情もある。

藍子はしゃがみ込みそうになる気持を押さえ、なんとか立っている。もちろん恥ずかしい。逃げ出したい。だが、これも全て裕人のためだと我慢している。

「裕人君、これじゃあ駄目？　やっぱり体操着とかの方が……」

「いや、これで成功だ」

声の方向へ振り向くと、そこには環が立っていた。スマートフォンと裕人を交互に見ている。

「立浪裕人は藍子を直視できていないではないか。これこそ意識し

ている証拠！」

「それじゃあパーソナルスペース——きゃっ！」

話している途中、藍子は背中を押される感覚と共に弾き飛ばされ、メイド服のまま派手に転んだ。

それを見た環は素早い動作でスマートフォンをこちらへ向け撮影を始めた。

「ドジメイドキター！！ もう我慢できん！ うはー、早速、ネットにアップしよう。何人が釣れることやら……フフッ」

不敵な笑みを浮かべて環はスマートフォンを操作する。どうやら彼女の狙いはここにあったようである。

反対にわけが分からないのは藍子である。上半身を起こし、肘辺りをさすりながら周りを見回した。

「痛っ……なんなの一体」

藍子が振り向くと、裕人が遙か遠くに立っているのが見えた。二人の間には何も邪魔するものはない。立ち上がって裕人に近づこうとするが、押し戻されるような感覚をおぼえて先に進めない。状況から考えてどうみても裕人の体質が原因。

彼女は裕人を意識させる事でパーソナルスペースを肥大化させることには成功した。距離にして七メートル。つまり、今までの倍。

「た、タマちゃん！！」

「ふむ。刺激が中途半端だったようだな」

「え————っ！」

仁村藍子の戦いはまだ始まったばかりである。

第5話 「痴女ってレベルじゃねえぞ！」

すっかり朝が寒くなって起きるのが辛くなるこの季節。

向坂高校へ向かう生徒は皆、上り坂に辛そうな顔をして登校する。その中で頬を赤らめて走る女の子が一人。もちろん仁村藍子だった。しかし今回は伴走者がいた。

「タ、タマちゃん、本当にこれで行くの？」

「ああ、ある意味最強だ。私を信じろ」

藍子の少し前を環が走っていた。

環の提案でコスプレを初めて十日ほどで三回目になる。今回の服装は膝下まであるベンチコートだ。ベンチコートから伸びる足は素足が覗いていた。

「さすがに寒いよお」

「我慢しろ。立浪裕人のためだろ」

「そうだけど……タマちゃん」

「なんだ？」

「前から激写するのを止めてね」

恥ずかしそうに走る藍子の周りを環はスマートフォンを向けて写真を撮り続けていた。「乙女の激闘の記録を撮る者がいないとな」

「全然人の話し聞いてくれないよお」

「とかいっている間に見えてきたぞ、お目当ての人物が」

藍子の走る先には徐々に裕人の姿が見えてきた。友人の彦野悟と歩いているようだ。後ろから近づく藍子に気づいたのは悟で、彼に教えられた裕人が立ち止まり後ろを振り向く。

すると藍子は七メートル付近で立ち止まり、向かい合う形になった。

「裕人君！ 今日は見えて欲しいものがあります！」

「え？ うん」

さすがに三回目となると周りの人間も勝手知ったるなんとやらで、立ち止まり見物を始める生徒もいた。

「ううううう、恥ずかしいいよお」

少しずつ回りの注目も集めていることに気づいた藍子は怖気づいて環へと駆け寄る。

「しっかりしろ、藍子。お前の裕人への気持はこんなものだったのか！」

「いいえっ！ 違います！」

「ふっ。だったら見せつけてやれ。お前の特訓の成果」

「はいっ！」

元気のいい返事をする藍子はベンチコートのファスナーを下げ始めた。少しずつコートの中がハッキリと見え出すと、裕人と悟は大きく目を開いた。

ちなみ藍子と環は特に特訓はしていない。

ファスナーが開くとピッタリと体型に張り付いた紺色の着衣が見え始める。胸には白い布があてられて二年三組仁村藍子と書かれてあった

誰がどう見てもスクール水着であった。思わず環の感嘆が漏れる。

「うはw w w wっ！ 良くやった、藍子！」

「もう、やだああああっつ！」

ベンチコートから覗いたスク水に裕人の隣にいた悟が拳を震わせて叫んだ。

「ス、スク水だと！ しかも旧スク水だ！ 排水用の隙間があるのがポイントだ！」

「悟、詳しいな……」

呆れる裕人にまったく怯まない悟。彼はある意味本物だった。

「もう、やだああ、恥ずかしいよお……」

一方、藍子はすぐにベンチコートを閉じてその場にしゃがみ込ん

だ。

「ふ、ふえええん……」

今にも逃げ出しそうな藍子に環はそっと耳元で囁く。

「藍子、裕人を見るんだ。こっちをガン見だぞ」

「ほ、ほんと？」

しゃがんだままの藍子の視線が前方に立ち尽くす裕人の視線にぶつかる。潤んだ瞳のまま少し歪んだ視界に恋しい人の姿をみとめた藍子が泣くのを我慢して鼻をすすする。

「さあ、立浪裕人にお前を見せつけてやれ」

「……うん」

藍子は恥ずかしさで震える足でなんとか踏ん張りながら立ち上がった。両手でしっかりとふさいでいたベンチコートの裾を少しずつ開いていく。

「裕人君。見て……」

「に、仁村さん？」

コートの中から紺色のスク水が姿をみせる。顔を背けながらコートを開けているため胸を張りながら姿勢に手の平サイズだった藍子の胸が強調される。

「——えいっ！」

頬を上気させた藍子が思い切ってコートを開く。走ってきたせいもあって、少し水気を吸ったスク水が立体感を帯びていた。胸の谷間やおへそ、脇の下の湿り具合を目の当たりにした裕人の心臓は張り裂けそうになった。裕人の隣にいた彦野悟が思わず叫んでしまう。

「あ、藍子ちゃん！ 痴女ってレベルじゃねえぞ！」

「ど、どう？ 裕人君」

「にににに、仁村さん」

見つめあったまま動かない藍子と裕人にじれったさを感じた環がベンチコートの襟を後ろから掴む。

「ええいじれったい！」

コートの襟を掴んだまま下へ一気にずりおろすと、冬の外気に素肌のスク水姿が晒された。透き通るような白い肌の二の腕が紺のスク水に映えた。

「きゃあああああああつ！」

涙目になりながら藍子は腰砕けにしゃがみ込む。着崩れたベンチコートが彼女の体を取り巻く。衣服からはみ出る桃色があった太ももは筋肉が動きまでも艶かしく見えた。また白みを帯びた細い腕が自分を抱くようにコートから見え隠れする。素肌と湿り気を帯びたスク水も扇情的であった。

藍子は瞳に涙を溜めながら上目遣いで裕人を見つめる。やがて口許を震わせながら訴えた。

「裕人くん。見ないで……ください」

「仁村さ——っ」

藍子の名前を呼び終わる前に裕人は後ろによろけながら、手で鼻を押さえた。すかさず、彦野悟が裕人を支え、表情を窺う。

「裕人がベタに鼻血ブーだ！ ブーだぞ！」

悟は両手を挙げて交差に振り、裕人のギブアップを宣言する。すると周りの男子生徒から「ブーだってよ」「ブーかあ！」と話し声が聞こえた。

さらに悟の宣言と同時に藍子は弾き飛ばされ、さらに後方へと押し出された。

「痛たたた……これって成功なの？」

すりむいた膝をさする藍子に環が興奮気味に駆け寄る。

「ああ！ 成功だとも！ この写真で何人がネット上で釣れるやら」

「タマちゃん、なんの成功の話？」

「さ、さあな……」

環はワザとらしく口笛を吹いて誤魔化した。

「ま、まあ。藍子には後で褒美をあげよう」

「え？ 褒美？ なんだか知らないけどやった〜！」

相変らず簡単に誤魔化されるなあと、ある意味感心する環であった。

藍子と環のやりとりを眺めていた彦野悟は「果たして学生が着るスク水はコスプレなのか？ それにしても次のコスプレ、期待、超期待」と心躍るのであった。

第6話 「イヂメがいる奴じゃ」

スク水事件が起きた放課後、教室に残ってノートパソコンを広げている環に藍子が近寄ってきた。藍子は口を一文字に眉間にシワを寄せている。

「あれ？ 一目散に立浪裕人の元へ向かうんじゃないのか？」

「タマちゃん、お話があります」

「どうした？ 一緒にネットする気になったか？」

「違うよ！ 私、ネットのことよく知らないし」

「ふっ、情弱が。だったらさっさと行け。目障りだ」

「駄目、ちゃんと話があるの」

すると藍子は肩幅に足を開き腕組みをして環をにらみつける。環は構わずにノートパソコンの画面を見ていた。「むむっ」という非難にも似た藍子の声が聞こえたが気にした様子はない。

「タマちゃん、私は怒っています」

「ほほう。しかしなあ、怒った人が怒ったって言うか？」

環がニヤニヤしながらノートパソコンから視線を移すと、藍子は涙目になって震えていた。しかし、頬も膨らませているので、悲壮感はいま一つなかった。むしろ環のイヂメたい指数を上げたに過ぎない。

「もう嫌！ 絶対にあんなこと嫌だからね！」

「ほう、どんな誤解だ」

「どくなって、知ってるでしょ？」

「うーん、お前との認識が違いかもしれないだろ。説明してくれ」

「えー。えっとね、朝一番に人前で……」

「人前で？」

「コートの中にね……ごによごによ」

朝のことを思い出したのか、藍子は顔を真っ赤にしながら言葉を

濁すのがやっとだった。赤面した藍子を見て環の口の端が釣りあがる。

「あゝそうだったな。コート開いたら扇情的な水着で、まるで露出きよ——」

「うわああああんっ！ タマちゃん、それ以上言ったらパソコンかち割るっ！」

藍子が涙目のまま近くにあったイスを持ち上げたのを見て環はノートパソコンに覆いかぶさった。

「わ、悪かった。今日のはちょっとやり過ぎだったな」

なんとか藍子をなだめにかかる環。口を尖らせながら藍子は文句を言った。

「あんな人前で水着姿なんて……エッチだよ」

「少しぐらいエッチな女の子が私は好きだぞ」

「タマちゃんの意見は聞いてません！ あれじゃあ裕人君に誤解されちゃうよ」

「まあ、裕人に嫌われたら、私とネットでもして過ごせばいいだろ」

「……うん、そうする」

「ふん。その気もないくせに」

「バレた？」

さっきまでのお怒りはどこへやら、藍子は小さく舌をだして誤魔化す。「まったく。こういう仕草を普通にやってのけるなんてな」環はため息をつきながらノートパソコンへと視線を戻した。彼女は基本的に一人でパソコンをする事が楽しいのだが、あまりにも藍子がネット関係に無関心なので、少しは自分と遊ぶ気はないのかとも思ったりする。こんな感情は矛盾しているし、なんだかんだで人恋しいのかよと自分に突っ込みを入れてしまうのが常だった。

藍子はしゃがみ込んで環と視線を合わせる。環には真剣な話をする合図のように思えた。

「タマちゃん、ちゃんと説明して。大体、ぱーそなるすぺーすの肥大ってどれぐらいになればいいの？」

「それはだなあ。かなり大きくなるまでだ」

「むう。具体的には？」

すると環は両手を左右に広げた。しかし環は体が小さいのであまり大きくは感じない。

「とにかくでっかくなるまでだ」

「いつ大きくなるの？」

すると環は言葉につまり、無言のまま藍子を見つめた。藍子も黙って見つめ返す。時間にして三十秒ぐらい続いた。堪えきれなくなった環は手をぽんと叩く。

「あっ、そうそう。ネットしなきゃ。ネトゲの仲間達が私を呼んでいる」

「誤魔化さないで！」

「まあ、そう悲観するな。パーソナルスペースが大きくなるか否かは、立浪裕人が藍子をより意識するかどうかにかかっているだろ。

つまりはお前次第だ」

「そうだけど」

顎に手を当てて考え込む藍子を見ると環はなんともいえない気持ちになった。恋人の悩みを聞くなんて友人だとよくある事なのかもしれない。友人だから応援するのが普通だろう。でも、同時に嫉妬のような感情も芽生える。藍子を独り占めしているのに取り残されたような感覚。だから嫌なんだ、人と関わるのは。環はノートパソコンの無機質な画面へ目をやると優しい口調で藍子へ答えた。

「とにかく、今日は良く頑張った。約束どおり褒美はちゃんとやるよ」

「なに？」

環は藍子を見ずにポケットから紙を取り出す。紙を受け取った藍子は黙読した。

「ほれ。これを読め」

「なにこれ？」

「今、駅前のネットカフェでカップルキャンペーンを行なっている。なんでもカップルで入店して二時間いるだけで、モンハンのレアアイテムゲットのイベントコードをもらえるらしい」

「モンハン？」

「『モンテスキューハンティング』というネットゲームのことだ。主人公はヤンキーで小難しいことをいう哲学者に焼きを入れるというゲームでな。かくいう私も……」

さらに説明を加えようとする環を藍子が手で制した。

「ようするに、裕人君とネットカフェに行ってイベントコードをもらってきて欲しいというわけだ」

「要するにそうだ。ちなみにキャンペーンは今日まで」

「タマちゃん！」

「な、なんだよ」

環は怒られるかと思い、ノートパソコンを庇うように手を伸ばした。同時に藍子も手を伸ばし、環の手を握る。環は体を強張らせた。「タマちゃん、ありがとう！」

「え？」

「カップルで入るって事はカップルシートなんか座ってカップルストローなんかで飲み物飲んで、それで、それで……」

藍子は顔を火照らせ、上を向いて両手で頬を覆った。妄想でおなか一杯になった姿を見た環は小さく笑ってノートパソコンへ視線を落とす。

「早く立浪裕人を誘ったらどうだ？ プリンセスタイムが終わるぞ」

「――はっ！ そうだった。じゃあ行ってくるね！」

藍子は駆け足で教室を出て行った。一人残された教室で環は机に肘をついてため息をついた。

第7話 「大丈夫だよ、きつと」

日が西にかたむき、辺りが赤やオレンジに染まる時間。校庭を走る女の子が一人。友人の環からもらった紙を持って息を弾ませる藍子だった。

校門にもたれながら待っている裕人を見つけると手を振って近づく。

いつもは近づけない距離を一気に縮め、肩が触れ合うほどに近づいた。

「ごめんね、裕人君。待った？」

「大丈夫だよ」

『全然待ってないよ』とは言わず、『大丈夫だよ』というあたりで、裕人が長時間待っていたことがうかがえる。藍子は頭を下げて謝った。すると裕人は慌てて「大丈夫だから」と言った。

『大丈夫』裕人が良く口にする言葉だった。藍子は少しこの言葉が気になる。裕人は藍子の言うことをよく聞いてくれるし、特に反対されたこともない。すべては『大丈夫』に集約されていた。大抵は「私に優しいなあ」と、くすぐったい気持になるが、「もっとわがまま言ってくれていいのに」と不満に思うこともあった。

そして今回もネットカフェのことを話すと「いいよ。大丈夫」と言ってくれた。

オレンジ染まる駅前を裕人と藍子が並んで歩く。人通りが多いせいで手を繋ぐことはできない。でも、藍子は満足だった。みんなの前で堂々と二人で歩くななんて凄く幸せなことだと思ったのだ。もし世間体を気にしないのなら「私たち付き合ってるんですよ！」って言いながら歩きたいぐらいだった。自然に笑みがこぼれる藍子はそ

つと盗み見るように隣の裕人の顔をうかがった。

裕人は特に表情もなく淡々と駅前を歩いていた。自分とは対照的な表情だけど、藍子はマジマジと見てしまう。実は藍子が裕人を好きになった理由は無表情な顔だったりする。自分が感情表現が大袈裟な分、物事に動じない大人な印象を持ったのだ。「きつと裕人君なら悲しいことがあっても動じないんだろうな。この人といれば色んなことも乗り越えられるかもしれない」と羨ましくなったのが興味を持ったきっかけだった。

だけど付き合ってみて、少し印象が変わった。もちろん普段は表情を変えず、どっしりと構えた頼りがいのあるイメージは変わらない。しかし、コスプレを始めてからの裕人のうろたえ様には新鮮な驚きがあった。「こんな表情もするんだ」と年相応な側面も垣間見えて嬉しくなったのも事実だった。

藍子が裕人をしばらく見つめながら歩いていると、ようやく視線に気づいた裕人が藍子へと顔を向ける。

「仁村さん、どうしたの？」

「あのね綺麗だなんて」

「え？ ああ、綺麗だね、夕日」

裕人は自分の奥で沈んでいく夕日へ目を細めた。藍子は裕人のことを言っただけだったけど、誤解されたことに苦笑すると同時に「このままでいいか」とも思った。

「この前も言っただけど、夕日って大気中のチリや埃が短い光の波動を弾いたり吸収したりして、長い波長の赤っぽい可視光線だけが僕らに届くからなんだよね」

「ふうん、不思議だね。私達が綺麗だと思ってたものは、チリや埃のせいだなんて」

「そうだね」と言っただけで裕人は黙ってしまう。特に不思議がることもなく藍子は見つめていたが、やがて裕人がポツリと呟いた。

「外側だけ見てたらわからないこともあるんだろうね。もっとも、

汚れた部分なんて人は見たくないと思うけど」

「裕人君？」

藍子が裕人を覗き込むと、彼は斜め下を向いて無表情というよりは苦笑しているように見えた。「この表情って、私が告白して返事を待っているときの表情に似てる」と直感で藍子は思い出す。告白時の不安が思い出されて少し不安になった。

「裕人君、手を握っていい？」

「え？ ……いいよ」

藍子が手を伸ばすと、裕人の手が包み込んだ。すると藍子は安心する。今は触れられるんだね。私たち付き合ってるんだよね。と心に言い聞かせた。

藍子と裕人はようやく環の言っていたネットカフェに到着した。

藍子は入店前に携帯電話で時間を確認する。時刻は日の入りまで後三十分をさしていた。おそらく店内で二人きりでいられるのは三十分。これから勝負だと意気込んだ。受付を済ませ店内に入る。カップルシートに座ることになるのだが、途中で自分は飛ばされてしまうだろうと藍子は考えた。しかし、その目論見は崩れ去った。

入店して五分ほどで徐々に裕人との距離が離れていくのを感じた。目に見えない圧力に負けて徐々に後退していく。藍子は慌てているが、裕人は諦めたように小さくため息をついた。まったく理解できなかった。まだ日没まで時間があるというのにどうして離せるのだろうか？ いつもと何が違うの？ と何度も自問自答した。せいぜい違うのは場所ぐらいだ。川辺とネットカフェ。

藍子が一気に飛ばされ、カップルシートから追い出されると、誰かが背中にぶつかった。

「ご、ごめんなさい！」

藍子が押し出されながら懸命に謝ると、ぶつかった相手が話しか

けてきた。

「意外に早かったな。だが店内にはいてもらうぞ」

「え？　――タマちゃん」

下げた頭を上げると目の前には環と彦野悟が立っていたのだ。

「ど、どうして二人で？　もしかして付き合ってるの？」

「「違うっ！」」環と悟はユニゾンのように声を合わせた。

「じゃあ、なんでここにいるの？」

「「好奇心」」再び環と悟は声を合わせた。

「ようするに私と裕人君を冷やかに来たってこと？」

「「うん」」環と悟はうなずいた。

「二人とも……」

藍子の瞳にどんだん涙が溜まっていく。さらに頬を膨らませて「むううう……」と唸りを上げた。

「おおっ、コスプレもいいけど、藍子ちゃんのプンプン顔も最高！」

「馬鹿、彦野悟、よく見ろ。コイツは本当に怒ってるぞ」

「え？　頬を膨らませてるのに？　マンガみたいな顔なのに？」

「……それを普通にやってのけるのが藍子なのだ」

環と悟がヒソヒソ話をしている背後では爆発寸前の藍子が小刻みに震えて拳を振り上げた。

「もうっ！　絶対にタマちゃんのノートパソコンをかち割るっ！」

「馬鹿！　それは店のパソコンだ！　彦野悟、藍子を抑えろ！」

「ええっ！？　それイスだよ？　なんで振り上げてるの？　うわああああああっ！」

この後、藍子、環、悟がお店の人にこっそり怒られたの言うまでもない。

精神的にヘトヘトになりながら家に帰った藍子は、仏前の母親に今日のことを報告すると自室へ倒れるようになだれ込んだ。

「もう、疲れちゃったよ」

藍子はなにに対して疲れているかよくわからなかったが、とにかく眠りたい気持ちになった。ウトウトとまぶたを閉じかけた頃、携帯の着信音が鳴った。確認すると裕人からの電話だった。一気に目が覚めた藍子はベッドの上で正座をして電話にでた。

「もしもし？ 今日のごめんさい！ ごめんなさい！ もうしません！」

裕人に話す機会を与えずに一気にまくし立てた。

『いや、大丈夫だよ』

いつもどおりの裕人の返事に藍子はホッと胸をなでおろした。こういう時の大丈夫は安心するなあと思子子の表情は弛んだ。

その後は今日の話や他愛のない話で時間が過ぎていった。だが、藍子にとってはこの時間こそが大切だった。特別な時間ではなく、なんでもない時間に二人で話ができる幸せを感じたのだった。すると疲れていた体がどんどん力を取り戻していった。恋するとはこういうことなのかな？ と藍子は思った。と同時に「やはり普通のお付き合いがしたい」と切に願った。

気持ちが高ぶった藍子は自分の気持ちをそのまま伝えることにした。

「裕人君」

『なに？』

低い声が藍子の耳に飛び込んでくる。それだけで胸が締め付けられた。

「裕人君の体質を治して、私たち本当の恋人同士になりたいな」

藍子は『僕もだよ』という答えが聞きたかった。「どうやって体質を治すか」の話でなく、自分に賛同して欲しかった。

しかし……」

『僕は今のままでも十分恋人だと思うよ』

「そうだけどね……」

『夕方には二人きりになれるじゃないか』

「わかってるけどね……」

わかってはいるが、裕人の返事に落胆している自分がいた。「なまじ触れられるから、不安になるんだよ」と反論がしたかった。

でも、それは裕人の負担になる。やっかいな体質を背負っているのは藍子ではない、裕人なのだから。

「裕人君、もっと声聞かせて」

『え？ うん……』

と言って黙ってしまふ二人。

だけど、藍子には十分に力となった。「裕人と二人で頑張ろう」と心に誓った。誓っただけでなく言葉にする。死んだ母親にそう誓ったのだから。

「私、負けないよ。絶対に勝利を手にするんだから」

『仁村さんがそう言うなら、応援するよ』

「え？ うん……」

裕人の言い方に引っ掛かりを覚える藍子。なんだか私だけ空回りしている気分だな。「でも、裕人君の体質が治ったら変わるよ。きっと」と自分を言い聞かせた。

第8話 「巫女とシールドマスター」

いつも通りの朝。向坂高校の長く緩やかな坂を上る生徒達。皆、
一様に寒さと坂道でしかめっ面で歩く……はずだった。二週間前ま
では。

裕人はいつものように悟と共に登校していた。特に変わらない裕
人の日常風景。

「悟、これ、どうにかならないかな？」

「でもねえ。俺も楽しみだし♪」

「こんな人がいたんじゃあ、恥ずかしいよ」

「お前が原因なのに恥ずかしがるか？」

いつもと違うのは、裕人の周りを取り囲むように歩く男子生徒達
だった。数にして数十人。彼らの目的はただ一つだった。

「裕人く~~~~ん」

「キタッ！」

裕人を含め、男子生徒の視線は坂の下に注目が集まる。やがてゆ
っくりと見えてきたのは手を振る藍子の姿だった。裕人は彼女の姿
を見とめると「あっ」と小さく声を上げると、顔が赤くなっていく。
藍子は高校の制服であるブレザー姿ではなく、白衣はくえに千早ちはやを上
纏い、緋ばかまをはいた姿はまさしく……

「今日は巫女だよ!!! 巫女さんキタ————ッ!!!」

裕人を取り囲む男子生徒たちは色めきだつ。

メイド姿で藍子が裕人の前にあらわれた事件から二週間。いつの
まにか藍子のコスプレ(?)は向坂高校の名物化していた。三日に
一度の割合で行なわれ、メイド姿やチャイナドレス、チアリーダー
のコスチューム等、主に環の指示によって行なわれた。結果、裕人
だけではなく、見物人を増やす結果になってしまったのだ。

速攻で藍子の周りに群がる生徒達。デジカメや携帯電話を向けら

れ、フラッシュの光りを藍子は浴びた。

「藍子ちゃん！ こっちに目線くださーい！」

「えっ？ ちょっとごめんなさい。裕人君に見せないと……」

「うはははっ！ いいぞ！ 私の指示通りじゃないか！」

「タ、タマちゃん、写真取ってないで手伝ってよ！」

環は男子生徒を押しつけ、写真を撮るのに夢中だった。

人だからからやや離れて裕人はそれを遠巻きにしか見ることができなかった。二人の距離はおよそ十メートル。さすがにここまで離れ過ぎていると客観的に騒動を眺めているに過ぎなかった。お陰でここ数日間、彼のパーソナルスペースの肥大は十メートルで止まっている。裕人は見えている事しか出来ない状況に苦笑した。

「裕人、そう落ち込むなよ」

「悟、お前……」

裕人は藍子の方には行かず自分の隣に居てくれる友人に感謝する。

「俺はあんな奴等とは違うぜ。俺に……巫女属性は無いっ！」

「あはは……」

拳を作って力説する彦野を見て、一瞬でも友人と思ったことを後悔した。

遠目から眺めていた裕人は制服から携帯電話を取り出すと、発信ボタンを押した。

少し離れた人だからから着信音が聞こえた。裕人が電話をかけた相手は藍子だった。

『あっ、もしもし、裕人君？』

「おはよう、仁村さん」

『ちよっと待ってて！ もうすぐそちに行くからね！』

「ううん。いいよ別に。巫女姿可愛かったよ」

『え……あ、ありがとう』

「それじゃあ、また夕方ね」

『ちょ、ちょっと、待つ――』
裕人は電話をしまうと、人だかりから離れ、校舎へと歩いていった。

「はあ……今日も収穫なしか」

藍子は校舎に入ると制服に着替え、教室に入る。すぐに環のもとへ向かう。

「タマちゃん、酷いよお」

「あー、待て待て。この画像を見ろよ。ミステリーサークルだってさ。誰が自作自演したんだろ？ ……『ソースを示せ』っと」

環はキーボードを叩きながらノートパソコンの画面を見て、藍子を見ようもしない。

藍子は頬を膨らませて、ノートパソコンと環の間に自分の顔を挟む。

「ちょっと、タマちゃん聞ってるの？」

「おおっ、ミステリーサークルってこの辺の画像らしいぞ！ すげー。どこだろ？」

「え？ どれどれ」

藍子はまんまと環の罠にかかり、文句を言うことを忘れてしまった。

ノートパソコンには小麦畑の真ん中に小麦が円形に倒されている画像が映し出されていた。

「これってUFOの仕業なんでしょ？」

「未確認飛行物体の存在は否定しないが、これがUFOの仕業だとは思えないがな」

「ふーん、そうなの」

「大抵は人の手による悪戯だからな。だが、近所にミステリーサークルがあるなんて知ると、信じてしまうかもしれん。この調子だと

あの噂もまんざら嘘と放置しておけないか」

「何？」

「立浪裕人、シードマスター説だ」

「しーどますたー？」

環はノードパソコンを使って、シードマスターに関するウェブページを藍子に見せた。しかし、藍子は読み始めて数秒で眉間にシワを寄せたまま視線を環へ送る。環はため息をついて説明を始めた。

「簡単に説明すると、人類の進化を急激に早めたのは隕石に付着したウイルスだとする説だ。シードマスターとは地球上へ意図的にウイルスを隕石につけた張本人である。種の進化を支配する主みたいな意味だな」

「つまり、隕石に付着したウイルスが人や動物に感染して、結果的に進化しちゃったってこと？」

環は頷くと、藍子を指差した。

「我々は勝手に立浪裕人の結界は体質のせいだと考えている。だがもし、シードマスターとして人類の新しい進化の姿だったら……と考えるとどうだろう」

「それってすごいことなんじゃあ」

「すごいだろうな。まあ、あくまで推測の域を出ないがな。だいたいの藍子のコスプレを見て興奮している程度でシードマスターなんて片腹痛いがな」

環の言葉に藍子は「あっ」と口に出して、用件を思い出した。

「話を誤魔化さないで！ 今朝、男子に混ざって写真とってたでしょ！ 私はタマちゃんの言うとおり、裕人君のために登校時間わざわざコスプレしてるんだからね！」

「すまん、すまん。で？ どうだ結果は？」

すると藍子はうつむいて「んーっ」と鼻を鳴らした。

「最初は良かったんだけど。あのね、もう朝のコスプレ止めようと

思うの」

藍子は環に今朝起こった裕人のそっけない態度を話した。

「なるほど。確かに、潮時かも知れんな。私も画像をアップするのに飽きてきたところだ」

「タマちゃん。ま、まさか、それが目的だったの？」

「二週間も気付かんとは……さすが藍子」

「褒め言葉になってない!!」

「褒めてないし」

「むうううっ!」と、ものすごい形相で睨む藍子を見て環はさすがにまずいと思った。大袈裟に咳払いをすると腕組みをして藍子へ自信満々に答えた。

「大丈夫だ。もう次の作戦は考えてある」

「ふーん」

今度はジト目で環を見る藍子。環の背中を冷たい汗が一筋流れた。
「なんだその目は……信用してないな」

「だって……毎日、毎日、恥ずかしい格好させるんだもん」

口を尖らせ少し拗ねた顔をして俯く藍子を環はデジカメで撮りたかったが、今度こそ愛想をつかされる気がして止めた。

「心配するな。今回の作戦は好きな服を着ればいい」

「本当!？」

「ああ、本当だ」

新しい作戦に好きな服を着ていいと言っただけで、機嫌が直る藍子を環は単純だなと思いつつ、素直に喜んでくれる態度に気恥ずかしくなる。環はちょっと自慢げに藍子へ作戦の説明をした。

第9話 「お兄ちゃん、ホントは私……」

授業も終わり、空が夕焼けに染まり、オレンジ一色に染まる時間。藍子が「プリンセスタイム」と勝手に呼んでいる時間。この時ばかりは裕人のパーソナルスペースも日没までの消滅する。

今日も肩が触れそうな位置で手を繋ぎながら川縁を歩く二人。最初に口を開いたのは藍子だった。

「裕人君、ちょっといい？」

「どうしたの？」

「あのさ、朝のアレ……止めようと思うんだ」

「アレってコスプレのこと？」

藍子は黙って頷いた。しばらく藍子を見つめていた裕人は前へ視線を移すと小さく頷いた。

「仁村さんが止めたっていうんなら良いんじゃないかな」

「やっぱり私次第なんだ……」

藍子は自分から言い出したことなのに少しガッカリした。別に止めて欲しいわけではないのだが、自分が空回りしているように思えたのだ。

裕人は藍子の気持ちをわかるわけもなく、前を見ながら話を続ける。

「それにさ。僕達このままで良いと思うんだ。夕方、一時間だけでもこうして会えるんだし」

裕人の言葉を聞いて藍子は彼の顔を見つめた。オレンジに染められて微笑んでいるようにも思えるが、彼女には諦めている様にも見えた。瞬間的に胸に複雑な感情が押し寄せ、藍子は強く手を握った。

「裕人君……それじゃ駄目だよ」

「ん？ なにか言った？」

「なんでもないよ」

藍子はすぐ近くで裕人がいるだけで幸せだった。確かに裕人の言う通りこのままでも良いのかも知れないと思う。でも、二人が一緒にいられるのは一時の事。この時間だけ楽しみにしても何の解決にもならない。なにより裕人自信が現状で良いなんていつて欲しくなかった。

奥歯をキツとかみ締めると藍子は裕人の前へ立つ。やや首をかしげて不思議そうにする裕人。一文字の口から藍子は意を決して話しかけた。

「あのさ、裕人君のご家族ってなにしてる人？」

「どうしたの急に」

「えっ？ ちょっとね。どんな仕事してる人なのかなあーなんて……」

「今ウチの両親は海外赴任で日本にいないんだ」

「やっぱり！」

「『やっぱり！』って？」

「あわわわ、こっちの話。じゅあ、お姉さんと二人暮らしなの？」

「うん。よく知ってるね」

お姉さんと二人暮らし。それは環の情報ですでに知っていた。付き合って一ヶ月以上たつのに家族構成も知らないとは情けないと思うが、今は背に腹は変えられない。

藍子は勇気を出して本題を切り出した。

「じゃあ今日、裕人君のお家へ行って良い？」

「ななな、なんで？」

後ずさりする裕人に藍子は一步踏み込む。

「お料理を作りたいの……駄目？」

彼女は環の指示どうり潤んだ瞳を上目遣いで裕人に向ける。裕人は藍子を直視できないようで顔を背けた。

「でももうすぐ一時間経つし……」

「やっぱり裕人君は近づけない私じゃあ……駄目なんだ」

藍子は環にこの言葉を絶対言うようにいわれていて、実行する。

効果はすぐに現れ、裕人は背けていた顔を彼女に向けた。

「そんな事無いよ!!」

「じゃあ、お家に行っても良い？」

「……う、うん」

裕人は完全に押し切られてしまった。

貴重な日没までの間に買い物を済ませ、裕人の家に着くと藍子はすぐに料理に取り掛かった。作る料理はカレー。定番である。この時点ですでに日は暮れていたので二人の距離は十メートル。それでも余裕で家の中に二人がいられるところを見ると裕人の家は結構大きめの家である。

「たぶん姉貴はもうすぐ帰ってくると思うよ」

「じゃあ、帰ってきたら挨拶するね」

同じ家にいるにもかかわらず、二人とも携帯を片手に話をしなくてはならない。裕人は近づくわけにも行かずに居間でテレビを見ていた。結婚してもこんな風に過ごすのかな、なんて藍子は考えながらキッチンで野菜を切っている。

「よし。まずは第一段階終了っ」と

そんな二人のやり取りを探る一つの影。もちろん環である。

彼女の考えた次の作戦とは料理を作ることではない。料理は作戦の一部でしかなく、環が藍子へ伝えた内容とは……パーソナルスペースを小さくすることである。今日までのコスプレはパーソナルスペースを大きくしてパンクする作戦だった。だが、考えてみればどこまで大きくなるかも分からず、元々環の欲望を満たすための作戦だった。

そこで今回の作戦は家に住み込めとアドバイスしたのだ。家族になれば自然にパーソナルスペースも小さくなる。接触機会も増える。立浪家は今、姉と裕人の二人暮らし。そこへ居候として妹の役割で家に入るのだ。

名付けて『お兄ちゃん、ホントは私……大作戦!』。

……無理である。無謀である。この作戦を持ちかけた時、環は冗談で言ったのだが、あんまり藍子が真剣に聞くものだから引くに引けなくなってしまった。さすがに自分も言った手前、責任を感じて二人のあとをつけ、家の外から双眼鏡片手に様子を見守っているのである。しかし、ただ見ているだけでは嫌なのでデジカメは常に用意していた。萌チャンスは見逃さない。十一月の夜は寒く、白い息を吐き出しながら植え込みの影にひっそりと佇む。自然に愚痴も出てくる。

「しかし外から様子を伺うとは間抜けだな……」

「確かに間抜けね。変質者みたいだね」

「そうなんだよな、弁解のしようがない……てっ——!」

環は背後から聞える声によく気づいた。

第10話 「藍子たんハアハア」

裕人は居間でテレビを見ながら考え事をしていた。それは姉にどうやってこの状況を説明するかであった。帰ってきたら、いきなり弟の彼女が料理作ってるなんて状況が面白いはずがない。食事当番は裕人の仕事なので、料理については何も言わないかもしれないが、嫁と小姑の対決が結婚もしていないのに繰り広げられるかもしれない恐怖に身震いした。

彼の心配が頂点に達した頃、家のチャイムが軽快なリズムをとって鳴る。チャイムの鳴らし方からして裕人は姉が帰ってきたと分かり、そつと玄関を開けた。

「姉貴、お帰り」

「ただいま。さっき庭先でこんなの拾ってきた」

裕人の視界には姉の横で肩を落としている同じ学校の女子生徒が立っていた。彼はその子に見覚えがあった。

「君は井端環さん？」

「私の名前を知っているとはさすが藍子の――」

環の言葉を裕人の姉は遮った。

「不法侵入者が偉そうに言わないで」

「す、すいません」

「あれ？ タマちゃん？」

玄関が騒がしいので様子を見に来た藍子は環の姿に驚いた。とはいえ、裕人がいるので奥から顔を出すことしかできない。

裕人の姉は大袈裟に口を歪めると、嫌味たっぷりに裕人へ話しかけた。

「なんだか今日の我が家は賑やかね……どういふことか説明してくれる？」

「あ、あの。これはね……」

「いや、話をさせてくれ。元々作戦を立てたのは私だ」ということで、リビングにて環が事情を説明する事になった。藍子だけが家の奥で座っている。

環は比較的簡素に事の成り行きを説明した。そこで重要視したのは、あくまでも自分がそそのかした事と藍子が裕人の事を本当に好きだということだった。

腕組みのまま裕人の姉は頷いた。

「なるほど。だいたい事情はわかった」

「藍子、悪かった！ 悪ふざけが過ぎたようだ！」

携帯電話を片手に環は頭を下げた。

かなり離れた先で携帯電話もった藍子は首を振る。

「大丈夫。もともと、妹になるつもりで来たんじゃないよ。私もそんなにバカじゃないし。ただ、裕人君にお料理を作ってたただけだから。だから、お姉さん環を叱らないでください」

「……藍子」

「電話で話すな。ほとんど聞こえないでしょ」

環が携帯電話を裕人の姉に渡すと藍子はさっきと同じ言葉を姉に告げた。

腕組みをしながら姉は少し考えるとポツリと言った。

「まず、私の名前は立浪真理亜たつなみまりあといいます」

『はい！ 私は仁村藍子といいます！』

「元気がいいな。まあ、まず自己紹介したのは、これからの付き合いのためだからね」

『どういうことですか？』

「しばらくウチの妹になる？」

「姉貴、なにいつてるんだよ」

裕人の抗議を手で制し、話を続ける。

「私も常々弟の体質を心配していたの。どの医者に見せても原因は

不明だというし。将来、こんなヤツ好きになってくれる物好きがいるのか？　と思ってた」

「自分の弟に無茶苦茶言ってるな」

環が思わず呟くと真理亜が睨みを利かせる。すると環は横を向いて大袈裟に口笛を吹きだした。環を見て「ベタな仕草だなあ」と裕人は思った。

真理亜は視線を家の奥にいる藍子に向けると、話を続ける。

「ここまでして裕人を好きになってくれる人間……いや、藍子ちゃんがいることが分かって少し安心したよ。良かったな裕人」

裕人は何も答えられずに姉を見つめた。真理亜は優しく微笑み、しかし口調は厳しく弟に話しかけた。

「彼女を大切にしなさい」

「……うん」

裕人自身は自分の体質に対して諦めにも似た気持を抱いていた。しかし、『裕人君の体質を治すために……戦う』といった彼女の気持ちも大切にしたいと思えた。

真理亜から携帯電話を受け取り、裕人は藍子へ話しかける。

「ありがとう。気持は嬉しいよ。姉貴もこう言っていることだし、今日ぐらいい泊まっていけない？　妹として」

しかし、裕人の言葉を聞いた藍子は首を振る。

「折角だけど遠慮しておくね。良く考えたら今、私がなりたいのは妹でもなく家族でもなくて……裕人君の恋人だから」

「藍子ちゃん」

立浪まりあは携帯電話に耳を当てて、二人のやり取りを聞いている。「うあああっ」と思わず言葉を漏らす。

「……裕人。彼女を私にくれ」

「なに言ってるの？　姉貴」

「藍子ちゃん。いや、藍子たんを私の世界にご招待したい」

裕人が姉の目つきが血走っているのを目撃した。前々から、姉は女友達ばかりを家に連れてくるなあと思っていたが、まさか……

「藍子たん、私のことはお姉様と呼んでくれてよくてよ」

裕人は自分の姉がそういう趣味だと確信した。

「止めてくれ。というか仁村さんはモノじゃない」

「チッ」

わざとらしく大袈裟に舌打ちする真理亜に裕人と環は「うわっ。この人マジだ」と身震いした。部屋の奥で藍子は首をかしげた。

その後、四人は藍子の作ったカレーを食べる事になった。

「うーん、上手い。藍子たんのカレーは美味しいねえ」

「ありがとうございます！」

「藍子たん、今日だけじゃなくて、いつでも夕食つくりに来て良いからね」

「はい！ お姉さん」

「ちちちっ。お姉さんじゃなくてお姉様。本当に可愛いなあ……」

「ありがとうございます。お姉様！」

「うはぁww藍子たんハァハァ」

笑顔の藍子対して舌なめずりする真理亜。二人の状況をデジカメを忍ばせて待機する環。

すると別の部屋から大きな声が聞こえてきた。

「姉貴。それ以上近づくなよ！」

「お前はその距離で一生悔しがってなさい。私と藍子たんは……」

「待て————いっ！」

「きゃああああっ！」

「裕人！ こっちに来るなっ！ 藍子たんが吹き飛ぶだろう！」

「わわわっ、ごめん！」

「よし、ネタゲット！（この状況をデジカメに収める環）」

慌しくも楽しい団欒の時間はあっというまに過ぎていった。食事の片付けを終えた藍子と環は帰る事にした。玄関には藍子と環、そして真理亜が立っている。

「藍子ちゃん、送っていいとか？」

「……ううん、心配しないで」

電話越しに裕人の声が聞こえてきた。彼だけは別室で待機しているのだ。いつもの半分ぐらいの笑顔で応える藍子の反応を見て環が口を挟む。

「お前じゃあ何の役にもたたんだろ、近づけないんだから」

「タマちゃん！」

「ホントの事を言ったまでだ」

「気にしないで裕人君……って凄い肩落として落ち込んでる」
今回はテレビ電話なので裕人の姿は携帯電話に映っていた。

「藍子、気にするな。アイツはもうちょっと落ち込んだほうが良い」

「でも……」

環が藍子の腕を引っ張って帰ろうと玄関を開けた。

ドアが開かれると同時にとても大量の光が辺りが差し込み始める。

「ええっ！」

「なんだ？」

ドアが自然に勢い良く開かれると家の中まで光に包まれ、家の中にいる四人は手で瞳を覆って遮るのが精一杯だった。

あまりの眩しさに誰もが目を瞑らなくてはいけなかったが、しばらくすると少しずつ視界が開けてきて周りが見えるようになった。

「ようやく見えるようになった……はああ？　なんだあれは！」

「タマちゃん、なんなの一体……」

「あれは……世界も進んだなあ。こんなものが現れるなんて」
藍子達が見たものは自分達の予想をはるかに超えたものだった。

第11話 「なんか近所にいそうな人だね」

音の無い世界。否。伝わることを知らない世界。それが宇宙である。

空間に漂う一隻の飛行船。いわゆるUFOと呼ばれる物体。見たことも無い材質でできた物体の中には一体の生物が懸命に手足を使って空間上に映し出された映像を操作していた。モニター上には青い星が映っていた。青い星は地球だった。

UFOの中の生物は地球上の写真を参考に自分の姿を地球人へと変えていく。画像は小型探査機が集めてきたものだ。空間に浮かぶ画像の中に日本の高校生の姿があった。立浪裕人である。生物は裕人の画像を取り出すとジッと見つめた。

「観測し始めて数年が経過してまるで変化がなかったが、私の撒いた種がここまで反応するとは……調べてみる必要がある」

手を空間で動かすとUFOは動き出し、地球へと進んでいった。



目の前に広がっている光景を誰もが信じられない。

麦藁帽子のような形をし、銀色に覆われた巨大な物体が宙に浮いていた。眩い光を放ち、聞いたことの無いような音を立てている。

それは、まさしく……

「あれはアダムスキー型UFO！」

「タマちゃん、知ってるの？」

「ああ。一九五二年、ジョージア・ダムスキーが遭遇したといわれるUFOだ。だがそれにしても……」

この時、藍子と環は同じ事を考えていた。

「ベタだね」

「ああ。ベタだ。まんまUFOじゃないか」

『何が起こってるの?』

受話器越しに裕人の声が聞こえる。彼は家の中に居て外の様子が伺えない。

しばらく、藍子たちが眺めているとUFOから一筋の光が地面に向けて差しこんだ。さらにUFOから光りに乗って生物が降りてくるのが見えた。

「宇宙人!？」

「さあ、こい! 金星人オーソンか火星人ラミューかそれとも土星人フアーコン?」

「タマちゃん、何言ってるか分からないよお」

生物が下に降りて来るにつれて次第に形がハッキリと分かってくる。背は小さく、頭には毛が無く、頭でっかちで目だけ大きい……とか言うわけではまっただけなかった。

外見上は全く地球人と変わらない女性。地球の年で当てはめると二十歳前後といったところ。艶があり長く腰まである黒髪。優しい笑みを浮かべながら地面に降り立つと藍子たちと向かい合う形になった。

藍子は環に耳打ちした。

「なんか近所にいそうな人だね」

「姿なんていくらでも変えられるさ……気を付けろ」

一瞬表情を緩めた藍子は「はい!」と元氣良く返事をする眉間に力を入れた。一方、環は宇宙人を睨みつけ警戒を解いてはいない。

「まさか私たちをアブダクションする気じゃないよな」

「アブダクションって何?」

「宇宙人による地球人誘拐の事だ」

「ええ! そんなのヤダよお! まだ裕人くんとしていたいこと一杯あるのに!」

「お喋りはそこまでだ。近づいてくるぞ」

宇宙人は少しずつこちらに近づいて来た。二人は身構えようとするが、思うように体が動かない。どうやら動きは封じられているようだ。宇宙人は二人の前に立つと口を開いた。

「じやうたじやうあがtkうあいおじょじやおうj」

「はあ？」

「なに言ってるの？」

宇宙人は耳に付けていたイヤホンをいじりだす。すると次第に言葉が分かるようになった。

「あ s j k t g …… 私の裕人に近づかないで」

「はあ？」

宇宙人は裕人の名前を口にした。

「何か呼んだ？」

携帯電話越しに裕人の声が聞こえる。彼にも宇宙人の声が聞こえたみたいだ。

すると宇宙人の表情が一変し、藍子達を潜り抜け家の中に入っていく。藍子達は首だけを宇宙人が進んだ後方へ向ける。

立浪家に走りこむと玄関にいる姉をすり抜け、奥の部屋へと進んでいく。ドアに手をかけ開くと、室内には携帯電話を持った裕人が立っていた。

「逢いたかった！ 裕人！」

「君は？」

首を傾げる裕人に宇宙人はそっと手を差し伸べる。頭に触れた瞬間手が鈍く光った。

「私、入江アンです」

「入江アン？ ……えっ？ あのアンちゃん？」

「覚えていてくれたんだ。嬉しい！」

「ちょ、ちょっと！」

真理亜と環が裕人の元へ駆けつけると目の前には裕人と抱き合う

宇宙人の姿が映った

「裕人、貴様あああっ！」

「立浪裕人、藍子が見ていなくて命拾いしたな」

「違う、違うんだって！」

一方、玄関先で携帯電話のテレビ電話で一部始終を見ていた藍子は唇をキュツとかみ締めた。

向坂高校の朝は今日も来る。緩やかに続く長い坂はいつも変わらず学生達を苦しめていた。その中でもとりわけ、藍子の表情は冴えなかった。隣で歩く環は彼女に氣を使つてなのか、黙ってスマートフォンとニラメッコしている。

前方にはいつものように藍子のコスプレを待つ人ばかりが出来ている。しかし、藍子が制服姿だと分かれると自然に分散していった。人がいなくなるにつれ、前方にいる二人連れの姿が見えてくる。一人は裕人、そしてもう一人は……昨日の宇宙人だった。

藍子は覚悟してたものの、いざ現実を目の当たりにすると立ち止まってしまう。裕人を見た藍子は近づけない齒がゆさで一杯だった。遠くから見る二人は楽しそうに会話しているようにも見える。隣いる環も裕人がいるのが分かったらしく、ため息をつく。

「朝っぱらからよくやるなあ」

環の言葉に藍子は前を向いたまま答えない。藍子の眼差しは今にも泣きそうに潤んでいた。環は藍子から視線を外し、大袈裟に舌打ちした。

「幼い頃、一緒に遊んだ幼馴染らしいぞ。ふざけてるな、宇宙人が幼馴染なんて」

「……昨日聞いた」

答えた藍子の口調にはなんの抑揚がなかった。

第12話 「私は聞かないぞ」

祐介と宇宙人の抱擁現場を目撃した後、裕人の家で藍子と環も一緒に宇宙人の話を聞く事になった。（藍子だけは別室でテレビ電話参加）

宇宙人は祐介の幼馴染だと言った。入江アンと名乗り、幼い裕人に近づいた。

理由はUFOのコンピュータが検索した結果、裕人が最高の子孫を残す事が出来る相手であるという結果が出たため。彼女は自分の住んでいた星はすでに無く、生き残りも彼女一人という状況で、自分の種族を残すためには最高の繁殖相手を探さなければいけないのだ。

しかし、当時の裕人はまだ子供。というわけで彼が繁殖可能な年齢になるまで待つ事に。宇宙規約（未開発な星にはむやみに近づかない等々、よく分からないので割愛）で長い間地球に居られない彼女は余計な虫が付かないように心に反応してテリトリーを形成する薬を彼に飲ませたのだ。

そして今回、かつて無いほどのテリトリーの変化を発見した彼女は心配になって地球に戻ってきた。というのが、大まかな話だった。

「宇宙人が幼馴染なんて……羨ましい。早速、デジカメでとってネットにばら撒いてやる！ って外見上は地球人と変わんねーからネタにもならん」

「……彼女の言う事は本当なのかなあ」

相変わらず冴えない表情の藍子を環はじっと見る。

「藍子のは信じるのか？」

「あのUFO見たら信じるしかないような……」

環は藍子の瞳の中に光彩を感じなかった。抜け殻のような気の抜けた表情に環は奥歯をかみ締めた。

「という事は藍子は諦めるんだな」

「……分からない」

「ふーん。分からないんだったらアイツの事、諦めれば」

いつもなら藍子は「そんなことしない！」と環に食ってかかるはずが「分からない」と言っただけ黙りこんでしまった。

入江アンは一緒に学校へ入ると、裕人と同じクラスに転入した。

休み時間も腕を組んで裕人から離れようしないアン。裕人の友人である悟でさえも近寄れない。一方的にアンが話しかけているようだが、周りから見ると仲むつまじい様子に見えた。

一方藍子は十メートルの壁が厚くて近づくことが出来ない。というのは建前で昨日の抱き合う二人が目には焼きついて離れないというのが本音だった。

何をするでもなく学校が終り、放課後になる。本来なら待ちに待った「プリンセスタイム」の時間。だが藍子は教室を出ることなく環も席へと向かった。

「タ〜マちゃん」

「なんだ？」

藍子は環のノートパソコンを覗き込んだ。

「わー、何これ？ 可愛い画像だね、保存しないの？」

「いやこの絵は制服着たネコ耳女の子だろ？ 今、ネコ耳フォルダに保存するか制服フォルダに保存するか迷っているところだ」

「へえー、今度さあパゾコンの使い方教えてよ、私全然知らないからさあ」

「なにっ！ 教えて欲しいだど？ お前が？ 興味なかったパソコンを？」

「駄目なの？」

環はようやくノートパソコンから藍子の顔へと視線を移した。横顔をしばらく見つめると、藍子も環を視線を合わせた。しかし、すぐに藍子が視線を外し、口許がだらしなく開く。まるで自嘲気味に笑っているように見えた。環は口を一文字に結んだ。

「私は聞かないぞ」

「え？ 何が？」

「言いたくないならそれでいい。私は一方的になんでも詮索して友達面する奴が大嫌いなんだ。だから私からはなにもしない」

「……わかってるよ」

藍子は黙って頷くと隣のイスを引き寄せて座る。傍目からもわかるような無理やりな笑顔を環に向けた。

「はぁ。藍子。とりあえず、パソコンをいじってみるか？」

「うん」

しばらくは、面白いウェブページなどを教えていたのだが、環の中で段々重苦しい気持が鬱積していった。

こいつ、立浪裕人と帰る時間をずらすために私と遊んでやがる。

環は机の下に隠した拳が震えていた。

こんなことが一週間続いた。

今日も夕暮れの教室に環と藍子の二人が残ってネットにいそしんでいる。

「こんな書き込みで釣れるのかな？」

「大丈夫だ。この掲示板の奴らはネタをネタとして楽しむ器を持っている」

「うーん。あっ、レスがついた。うわあっ、一気に二十件も返事が！ あはははっ！」

「だから言ったら。藍子は意外に釣り師に向いてるかもな」

「えへへ、照れるなあ……」

「素朴なところが馬鹿な愚民どもを騙すんだろうな」

「もう！ タマちゃんひどいよ」

「叩くな、痛い痛い！」

環は密かな願望があった。それは『藍子と一緒にパソコンを囲んでネット掲示板の愚民どもを煽る』というものだった。藍子に対する唯一の不満としてパソコンに興味がないというところだったので、ネットジャンキーの環としては自然とも言える。

だから今の状況は夢の達成、嬉しい時間のはずだった。しかし、環の表情は段々険しくなっていく。藍子がネットの楽しさを知って笑うたびにストレスが溜まっていった。そしてとうとう藍子の何気ない一言に爆発してしまった。

「次はどんなこととして遊ぼうか？ 裕人君」

「――っ！ 私は……環だ」

「あっ……ごめんなさい」

肩を落として落ち込む藍子を見て環は口許が震えた。

さっきまであんなに笑っていたのになんでそんな顔するんだ。なぜ？ なぜ！

環は気づけば立ち上がっていた。

「タマちゃん？」

「……すまん。ちょっとトイレに行つて来る」

いつの間にか環は走り出していた。理由は彼女自身もよく分からなかったが、目的はハッキリしていた。

オレンジに染まる川沿いを裕人と入江アンが歩いていた。アンは立浪家に居候になり、変える方向が同じなのだ。

「アンちゃん。申し訳ないけど、もう少し離れてくれるかな」

「だゝめ。もっと貴方を観測させて」

「観測って」

するとアンは裕人に腕を絡ませて、胸を彼の肘に当てるように寄り添った。

「すみずみまで見てアゲル。今日は一緒に入浴して下半身を調べさせてね」

「だだだ、駄目だよ！」

腕を動かし、なんとかアンの腕から逃れようとするが、その度に「いやっ」と胸に押し付けるので脱出することもできない。

だめだ。これじゃあ仁村さんに申し訳が立たないよ。と思うが、心の片隅でこれで良いんじゃないかとも思う。

そんな時――

「おい、立浪裕人！」

「はい？」

裕人が振り向くとそこには井端環が立っていた。一文字に口は結ばれているものの端がわずかに震えている。背の小ささで上目遣いになるのは仕方ないが、瞳もわずかに潤んでいるように思えた。いつもの余裕たっぷりの様子ではなく、どこか追い詰められたような悲壮感が漂っている。

第13話 「素直にオレンジ」

「お前、このまま終るつもりじゃないだろうな」

「えっ……」

裕人は答えることが出来ない。環は瞳に力を入れ裕人を睨む。代わりにアンが裕人への密着度を増しながら環へ話しかけてた。

「ねえ、裕人。誰？ この人？」

「宇宙人はだまってる！」

環が一喝すると、少しムツとした表情を向けるアン。宇宙人に構わず環は裕人へ話を続けた。

「私は藍子をからかうのが大好きだ。アイツはイヂメがいがある」
裕人は黙って話を聞いている。

「でもな、私はアイツが悲しんでる姿を見るのが大嫌いなんだっ！
」

環は自分が支離滅裂なことを言っているのはわかってた。わかった上でぶつけなければいけないと思ったのだ。珍しく我慢している藍子の代わりに。

「立浪裕人、藍子を悲しませるような事があれば……お前の家の住所と写真をネット上に晒してやるからな！」

首にぶら下げたデジカメを前に突き出し、裕人に迫る。子供じみた脅迫だ。環も自嘲してしまうほどに幼稚だった。だが、裕人は真剣な表情で環を見つめた。

「藍子は大して辛い時はずぐ泣きついてくるくせに、本当に辛いときは黙ってなにも言わん……アイツはそういうヤツなんだ」

環に頬に一筋の涙が零れた。数秒後、落涙に気づいた環は手の甲で瞳をぬぐう。こんな奴に本音を話すなんて、涙を見せるなんて……悔しい。

でも、全て出し切らなければ、藍子の友人と言えるのか？ 環は

自分のこだわりを捨てた。

「だからアイツのことを頼む。多分お前しか……藍子が気持ちを救う人間はいないんだ」

言い終わると環は裕人に頭を下げた。裕人は慌てて環の頭を上げさせると、黙っていた口を開く。

「わかったよ。環さんの気持」

「私の気持ちをわかってもらっても仕方ない。救うべき人間を救ってくれ」

「うん。できることはしてみようと思う。ありがとう」

「ふん、私は藍子が大切ただけだ。お前なんか死んじまえ。ちょっと待ってろ、今連れてくるから」

環は再び学校へ向けて走り出した。

そして数分後。教室戻った環は何事もなかったかのように席に座った。

「タマちゃん遅かったね」

「ああ、全部出すのに苦労したんだ」
すると藍子は顔を真っ赤にさせてうつむいた。

「えっと……あの、お通じに良い薬あるよ」

「お前、なにか勘違いをしていないか？」

そうだ。自分にはもう一つ仕事があるんだと環は大きく息を吸い込む。さらに藍子をにらみ付けた。藍子は不思議そうに目を丸くして環を見つめた。

「どうしたの？ タマちゃん」

「私はな一緒にネットをするという願いがかなって嬉しい。お前、ちっともネットしないだろ」

「そうだね。じゃあ、願いが叶ったんだね」

「ああ、叶った」

「おめでとう」

「ありがとう……でもな」

「ん？」

言わなくてはいけない。でも、このままで良いんじゃないかという気持ちもある。環の中では葛藤が起こっていた。

「嬉しいんだけどな」

「うん」

「『ぎゃははは！』と高笑いしたいんだけどな」

「うん」

「だけど……無性にムカつくんだよ！」

男なんかに構わず、友達としての時間を一緒に過ごして欲しい。だけど、同時に幸せになって欲しい。くそっ、なんで両立できないんだよ。環は思いの全てをぶつけることにした。

「その気もないのに私の趣味へ入ってこないでくれ！」

「タマちゃん……」

藍子の瞳が大きく開く。口許も震えている。別に悲しませたいわけじゃないんだ。だけど、進もうとしないお前が歯がゆいだけで……いや、何もできないと決め込んでいた自分が腹立つんだな。環は自分らしくない行動に苦笑する。

「立浪裕人のことで悩んでいるくせに。どうして何も言わない！」

「言ってることが矛盾してるよ。一週間前は『言わなくていい』って……」

「うるさい！ 人間とは矛盾の中で生きるものなんだ！ 人の気持ちを画一的に判断するんじゃない！」

無理を通せば道理が引っ込む！ 心の中で叫びながら環は言葉を続けた。

「どうした？ お前らしくないじゃないか！ いつもなら立浪裕人

と入江アンの間に割って入るんじゃないのか？」

「でも……」

「気づかないのか？ 入江アンがどうして易々と近づけるのか？」

「え？」

「立浪裕人が入江アンを意識していないからじゃないのか？」

「――っ!？」

「立浪裕人は受身でクソみたいな男だ。だが、今回はアイツの体質のお陰でハッキリとしているじゃないか。きつとお前のことが……くそっ、言わせるな、恥ずかしい！」

「……タマちゃん。ありがと」

憑き物が落ちたようにすっきりとした表情の藍子をみて、環は嬉しい反面悔しくもあった。

「ちよっと用事を思い出したから。私、先に帰るね」

「ああ、行ってこい。まだ川沿いを歩いているはずだ」

「ありがとう、」

藍子が走り去った後、環は呟く。

「ったく。藍子を独り占めするチャンスをみすみす取り逃がすなんて馬鹿だな私は」

藍子は急いで川沿いへ向かう。辺りはすでにオレンジ色に染まっている。

周りはほとんど人影は無く、静かだった。もしかしたらもう帰ったかもしれない。藍子が不安に思いつながらも、辺りを見渡した。

すると前方に二つの影。シルエットからして裕人と入江アンに間違いないかった。藍子は駆けつけようと勢いをつけた瞬間。見えた光景に息が詰まる。

重なる二つのシルエット。それは、二人がキスした瞬間だった。

第14話 「USED! 中古っ! 手垢の付いた人間!」

藍子は現場を目撃して立ち尽くしてしまふ。お気に入りだったオレンジ色の風景でキスをする二人。もちろん自分ではない誰かと好きな人がキスをしている。

丁度体勢の関係で藍子は裕人と目が合ってしまった。裕人も藍子と視線が合うと大きく目を開けた。

「やつ、ヤダ……」

藍子は一二歩後退すると振り向き、離れるように走り出した。

「ちょっと待ってよ、藍子ちゃん!」

藍子は裕人を無視して駆けて行く。裕人は懸命に走って彼女に近づき肩をつかんだ。

「ねえ、藍子ちゃん。聞いてよ、僕……」

「……使い古し」

振り向かずに藍子は一言呟く。

「え?」

裕人が戸惑っていると、藍子は振り向いて一気にまくし立てる。

「USED! 中古っ! 手垢の付いた人間!」

「はぁ?」

「入江さんとキスしたくせに……」

「聞いてよ、これには訳があつて……」

「聞きたくない!」

藍子は裕人の手を振り払い、涙の溜まった瞳を彼に向けた。

「私、すごく、すごく……悲しかった」

裕人を睨みつけた藍子は再び背を向け歩きだした。裕人は後ろから見ているので藍子の表情が伺えなかったが、肩が震えていたので何となく予想は出来た。

「待ってよ、藍子ちゃん!!」

無視して進む藍子の腕を強引に裕人が掴む。

「痛いっ!! 離してよ」

「止まってくれるまで離さない」

藍子は裕人に顔を向けた。目を真っ赤に腫らして、頬には涙の後がある。

少しの睨み合い後、藍子は観念したように裕人と向かい合う。

「先に入江さんとキスしたことが問題なの？」

裕人の言葉に藍子は大きく瞳を開いた。口許がわずかに震えている。

「そ、そんな言い方ってないよ! 私より先に入江さんとキスした。付き合っている私よりも先にだよ! 重要なことでしょ?」

珍しく藍子が怒った姿に裕人もつられムツとして言い返す。

「前にしたって、今したって同じじゃないの?」

「裕人君、全然分かってない……この後何回キスしたって私より前に入江さんとキスした事実は消えないんだからっ!」

「ちゃんと訳を聞いてよ。僕だって事情があるんだ!」

「もう、裕人君なんて信じられないよっ!」

藍子の言葉で裕人の腕を掴む手が一瞬緩む。彼女は裕人の手を振りきると、そのまま走り去った。裕人は呆然としたままで追うことが出来ない……

日は既に暮れ街燈が裕人を照らす。

「こんなはずじゃなかったのに……」

頭が混乱したまま一人で裕人は家に帰った。

環の言うとおりに前向きに対処した結果が、現在の自分だった。

何が悪かったんだ? ちゃんと説明すればわかってもらえるはずなのに……結局、いつもと同じかよ。

裕人はベッドで布団を被るものの寝付くことができない。

やっと、やっと本物に出会ったと思ったのに。思ったのに……もう終わりだ！

いつの間にか外は明るくなり、朝になっていた。

部屋にノックの音が響いてドアが開かれる。姿を見せたのはアンだった。裕人が何も答えずにいると、勝手に話し始めた。

「夕方はごめんなさい。でも私、お礼が言いたくて。これで私の星は救われるかもしれない」

「……そう、良かったね」

「ありがとう、じゃあね」

ドアが閉まり、再び室内が静かになる。

裕人はベッドの上でひざを抱え、壁をぼんやり見つめた。

結局こうなるんだよ。この体質だから……悪いんだ。

せっかく掴めるかも知れない希望も全部なくなってしまった。

全部、全部……もう、もう……嫌だ。

もう一人でいい。感情のなにかが引きちぎられる音が心に聞こえた。

静かになった室内で裕人の叫び声が響く。

「くそっ、なんなんだよ！　もう全部、嫌だあああああああ
っ！」

第15話 「で? なんでキスになるんだ?」

朝になり、制服に着替えた藍子は学校に行くことが憂鬱だった。裕人に会わなくてはいけない。もしかしたら裕人が弁解に来てくれるかもしれない。

ふと、裕人の言い訳ぐらい聞けば良かったかと思う。だが、慌ててそれを打ち消す。藍子にとってはその時その時が大切なのに自分をないがしろにした上、キスまでした裕人が許せない。ただ、決定的な現場を見てしまったことで、涙も出ない自分が不思議でもあった。

いつものように朝食を済ませ、仏間に向かい、瞳を閉じて母へ手を合わせる。

ふと思いつく二年前の出来事。母親は交通事故で死んでしまった。他愛もない会話を繰り返して、いつもの日常に起きた青天の霹靂だった。なんでもっと色々話さなかったんだろう。後悔だけが残った。その日から藍子は自分の気持ちはなるべく伝えようと決めた。だから裕人に告白するときも、内気な自分をなんとか払いのけ「好き」と伝えたのだった。

瞳を開けると目の前には母の遺影が。大切な人のことになるやっぱり話せなくなる。怖いのだ。でも、遺影を見つめると自然に素直になれた。言わなきゃ。伝えなきゃ。もう後悔したくないよ。「うん」と一言呟くと力強く立ち上がった。

——その瞬間、何かに押されるような感覚に襲われた。勢いのまま壁にぶつかるのと動けなくなった。「なんのこれ……」わけがわからなかったが、この感触には覚えがあった。裕人のテリトリーの衝撃だった。壁伝いになんとか外にでると一気に押し出されるように家から離れていく。

藍子が背中を押されながら走っていると、隣から悲鳴を上げてい

る人の声が。声のする方角へ顔を向けると同じように走っているエプロン姿のお隣さんが姿が。

「え？ なんなのこれ？ 裕人君のテリトリーに何か異変でもあったの？」

五分ほど押し出された先には大勢の人たちが集まっていた。ちょうど人だかりの手前で押し出される感覚が止まった。まったく意味がわからないままに立ち尽くしていると、藍子と呼ぶ声が聞こえた。振り返ると環の姿があった。

「ようやく、真打の登場だな」

「どういうこと？」

「こっちが聞きたい。事情を説明してもらおうぞ」

手を引かれて進んだ先には裕人の姉、真理亜と入江アンが立っていた。一瞬、藍子の足取りは止まるが、「気持はわかるが、今は我慢しろ」と環が力強く引き寄せた。

「藍子、見ての通り、ここにいる人たちは裕人のテリトリーに押し出された」

「ええっ？ 見ての通りって……」

辺りを見回すと皆ほとんど顔見知りだった。藍子が周りを確認したのを認めると環は説明を始めた。

「この町内の人全員だ」

「ええっ、どうして？ だってテリトリーは……」

「そうだ。好きと意識した人だけだったはずだ。なのに今は無差別に広がっている。しかも、じわじわと広がっている」

「なんで？」

「知るか！ だが結論から言えば、裕人は全ての人を意識して遠ざけていると言うことだ。原因があるとすれば、お前か入江アンだろうな」

昨日のことだ。と藍子は直感すると同時に俯いて無言になってしまった。環はため息をついて腰に手を当てた。

「話してみる。私と別れた後なにがあった。」

藍子は観念して、キスの現場を見たこと、喧嘩して分かれたことを説明した。

「立浪裕人……万死に値するっ！　今すぐ私がしばきあげてやる！」

「藍子たん。姉の私からも謝るわ。裕人がそこまでだらしのない男だなんて……」

「いえ。私も言い過ぎたから」

「「言い過ぎじゃない！」」

環と真理亜は同時に藍子へ返事をした。なんだか味方が増えた気がして少しホッとした。

「待ってください。裕人は悪くない。悪いのは私なんです」

三人に割って入ったのは入江アンだった。環と真理亜の厳しい視線がアンに突き刺さる。藍子は横を向いて見ないようにした。

「環さんが去った後、裕人は私に『付き合うことができない』ことを伝えてきました」

藍子はアンの言葉に反応して、彼女を見つめた。アンは藍子へ視線を合わせるとハッキリとした口調で答えた。

「だから、私から無理やりキスをしました」

「その行為で藍子がどれだけ傷ついたかわかってるのか！」

「タマちゃん、止めて！」

藍子に抑えられて環はなんとか暴れる気持を抑えた。アンは口許を震わせていたが、やがて唇をかみ締めると、環へ叫んだ。

「私だって必死だったんです！　彼のウィルスが欲しかっただけなんだから！」

「そういうことだ。裕人へ近づいた本当の理由があるようだな」

「はい。ご説明します」

アンは頷くと地球人にも分かりやすいように用語を変化させて説明を始めた。

「戦争で同胞が減ったなんて嘘です」

「嘘だと？ なんのために」

「見栄です。戦争とか星人滅亡とか絡めたら大事になるかなって心配してくれるかなって」

「宇宙人が見栄張るなっ！ この狼少年ならぬ、狼宇宙人！」

真顔で『見栄』と言い切るアンをみて、環は空いた口が塞がらなかった。藍子も眉を八の字にした。

「本当は地球で言うところのウイルスが原因なんです」

「ウイルスだと？」

「はい。このウイルスに感染すると、好意を持った人物に近づけなくなる病気です。私の星ではこの病気が大流行しました。好意によって発生する体内ホルモンを食料とするウイルスが感染すると、切なさを増大させるために、テリトリーを発生させて、接触による発散を防ぐという症状をもたらすのです」

「やっかいなウイルスだな。繁殖活動ができづらくなるな」

「タマちゃん。繁殖活動って？」

環は一気に赤面し、藍子へそっと耳打ちした。すると藍子も一気に赤面する。

「聞いた私が馬鹿でした……続きをどうぞ」

環と藍子につられて赤面したアンが咳払いをして話を続けた。

「環さんがおっしゃったように好きな人に近づけないことで少子化が進みました。子供が減っていき。愛のある結婚が困難になり……星は壊滅状態に」

「なるほど」

環は腕組みをしてうなずくとゆっくりアンに近づき、頭を叩いた。

「痛っ！」

「タマちゃん！」

「うるさい。ウイルスって十分大事だろうが！ 見栄張る意味がわからんわっ！」

涙目になりながら、頭を摩るアン。宇宙人像からことごとく離れていく彼女を見て、環はため息をついた。

「はぁ。だが、お前たちの星も馬鹿の集まりではないだろう。ワクチンは作ることができたのか？」

アンは首を振った。

「私の星の状況では打開策が見つからなかった……そこでウイルスへの抗体を作るべく、環境の違う地球へ病原体を撒いて観察することになりました。過去にも地球でウイルスを撒いて進化できた実績があったので」

「なるほどな。お前がシードマスターだったわけだ」

「結果は芳しくなかったのですが……最近、裕人の体に数値上の変化が現れました。テリトリーが大きくなったり、消えたりするなんて、私達の星ではなかった。だから私は彼のウイルスが欲しかっただけの」

「で？ なんでキスになるんだ？」

「あのウイルスは粘膜感染しかしないからです。キスが手っ取り早いかんと思っ……」 「どうしてそうなるんだよ！ 口の中の粘膜を採取すればいいだけだろ」

「事情を話そうと思ったら、彼が『もう付きまとうのは止めてくれ』って言うものですから。今、採取するにはこの方法しかないって……」

「っていうかお前も感染するだろ」

「でも、宇宙船のコンピュータが採取しろって言うので……それにもう私は発症しているので問題ないです」

「だったらなおさら意味ないだろう。お前はなにがしたいんだ？」

「もしかして私の努力は無意味？ コンピュータの言うとおりにし

たのに！」

「お前はそのコンピュータ依存から抜け出したほうがいい」

「でも、私は頭が弱いから無理……」

するとアンは両手を頬で覆い、左右に顔を振って恥ずかしがった。環はそれをみてため息をついた。

「この宇宙人は馬鹿がアホかわからんな」

「タマちゃんどっちもけなしてるよ」

「だって、私達の星のウイルスには日没前にテリトリーがなくなるなんて症状無かったものですから……」

「なんだと？ それは本当なのか！」

環はアンに掴みかからん勢いで迫った。アンは口をパクパクさせながらもなんとか答えた。

「は、はい。ですからこれを解析して一時間でも好きな人と触れ合うことができれば、私達の星もやり直せるかもしれないと……」

「おい、地球にはあって、お前たちの星に無いものはなんだ！ 答えろ！ 特に夕暮れ時だ！」

「ええっ！？ 急に言われても……私、頭が弱いから」

アンは腕組みをはじめ考え出した。環は「宇宙人も腕組みして考えるのだろうか？」と藍子に耳打ちした。数秒後、ぽんと手を打つとアンは答えた。

「そうだ！ あんなに綺麗なオレンジ色の恒星を見ることはなかったわ」

「恒星？ ああ、夕日のことか。心もとないがそれをヒントに探すしかないだろ」

「うーん、うーん……」

「入江アン。お前に期待はしていない。早くUFOのコンピュータに考えさせるんだ」

「はっ！ そうでした。早速行ってきます」

大急ぎで走り去るアンを見て環はため息をついた。

「あの星の仲間も皆馬鹿なんじゃないのか？ UFOも偶然作れたとかさ」

それを聞きながら藍子は顔を引きつらせて笑うしかなかった。

第16話 「ファーストキスの相手は？」

アンを見送った藍子に背後から声が掛かった。

「なんだか大変そうだね」

「彦野君」

「オレの名前覚えてくれたんだ。ありがと。ちょっといいかな？」

藍子が環を見ると真理亜と真剣に話をしていた。今後のスケジュールでも話し合っているのだろうか。

「うん、いいよ」

悟について人気のない路地へとはいった。

「悪いな、裕人じゃなくて」

「そんなことないけど」

「さっきさ。偶然話を聞いたんだけど。入江アンと裕人がキスした現場を見ちゃったんだって？」

「……うん」

「初めてのキスを取られたと思った？」

「えっ！？ ……うん」

「それなら心配ないよ」

「どうして？」

「裕人のファーストキスの相手は俺だからさ！」

「ええええええっ！」

藍子は口許を手で押さえつつ後ずさりした。悟はすぐに意味を察知した。

「違う。違うんだよ！ 中学の頃、修学旅行で酒飲んじやって勢いでだよ！ ホントだよ！ あの後二人で泣いたんだよ！ 初めてのキスがああああって」

手をジタバタさせて弁解する悟を見ているうちに藍子はなんだか

自分が変なこだわりを持っているのかもしれないと思えてきた。誤解が解けたと判断した悟は「いきなりだけど」といって真剣な表情で藍子へ質問した。

「不躰な事聞くけど藍子ちゃんから裕人へ告白したんだよね」

「うん」

藍子がうなずくと悟は小さく息を吐く。

「だろうね。アイツから告白するなんてありえない」

「どうして？」

彦野は場を和ませようとしているのか、笑顔で藍子に話しかける。

「すぐに『いいよ』って言ってくれたでしょ？」

「彦野君、何が言いたいのか？」

「まあまあ、最後まで聞いて。実はアイツ、誰の告白でも受けているんだよ。断ったりすると逆にヤル気出したりするから。『いいよ』って言うておいて、相手が根負けするのを待つんだ」

ただえさえキス事件で傷ついてる心に塩を塗るような彦野の言動の意味が分からず、藍子は戸惑った。

「でも、それは多分、嘘だと思う」

「え？」

「アイツ、きっと何処かで自分を受け入れてくれる人が現れるのを待ってるんだと思う……あくまでも友達の勘だけど」

藍子は考えてみると自分の言うことになんでも「いいよ」と言うてくれる裕人の姿しか思い浮かばないことに気づいた。

「今までは皆、一・二週間で諦めたんだ。やっぱり、いつも近くにいる人が良いもんなんだ。だから、藍子ちゃんが一番長い記録なんだぜ。自慢しても良い」

藍子は彦野が自分を励まそうとしているのだと分かった。そうした彼の気持ちが嬉しかった。

「話を少し変えようか」

「うん」

「アイツ、自分の体質が入江アンのせいだと分かってから、ずっと彼女と一緒にいるだろ？ あれってさ彼女から自分の体質を治す方法を聞きだすためなんだって」

「――っ！」

「裕人も少しずつ君との事を本気になってきたんだろうな」

藍子の脳裏にオレンジ色に染まる水面が浮かんだ。これは裕人の思い出の光景だった。「あの風景を大切にしたい」藍子は自然に拳を握っていた。

待ってるだけじゃ駄目なんだ。今までのようにぶつかっていこう。裕人への想いを自分の頭に叩き込む。

「誤解は解けたかな？」

藍子は首を縦に何度も振った。

「悟君。ありがとう」

お礼を言いながら走り去る藍子を見送りながら、彦野は自分が本当と言いたかった事を思い出した。

「藍子ちゃん！ 頼むからコスプレ復活してくれっっっ！っ！」

一方、騒ぎの元凶である立浪家は静まり返っていた。

第17話 「どうせ・やっぱりな・こんなもんだ」

一方、騒ぎの元凶である立浪家は静まり返っていた。

「どうせ本気じゃないんでしょ？」裕人が心でいつも思うこと。

外の状況など知らずに裕人は自室でしゃがみ込んでいた。すでに時間は十二時を過ぎている。学校はズル休みだ。姉や入江アンは部屋にもたずねてこない。

「こんなものでしょ？」裕人はため息をついた。

『私、貴方の障害なんて気にしない』そう言いながらも去っていく女の子を裕人は何度も見てきた。自分を本気で好きになってくれる人なんて誰もいないんだ。いつしか歪んだ考えが支配していった。

その結果できたのは表面上では優しく微笑みながらも、決して相手を信じてない諦め人間。「どうせ」と否定し続け、相手が諦めた途端「やっぱりな」と自分の考えに安心して、「こんなものだ」と自分自身も諦めてしまう。

だけど心の隅では「もしかしたら今回こそは……」と期待して傷つく自分がいた。

藍子が告白した時も同じだった。だから「どうせこの子も同じだろう？」と苦笑いがこみ上げてきた。次は一週間持つか。悟に『付き合う期間を賭けるか？』と聞いたら殴られるかな？　なんて思ってもこみ上げた。

大抵最初は誰でも張り切る。しかし、裕人に近づけないとわかれれば、次第に理由をつけて会わなくなる。そして自然消滅、もしくは別れを切り出される。『やっぱり私には荷が重いわ』とか言う。「ふざけるな」と言いたかった。期待させて自分勝手に裏切ってお前はそれで気が晴れるかもしれないが、僕はどうなる？　この体質

を抱えたまま過ごすんだぞ。もう嫌だ。他人の偽善に期待して捨てるのは。

だから、今度からは僕が最初から捨てるんだ。表面上でしか相手も見ないんだ。おあいこじゃないか。だからなんでも彼女の意見には賛成することにした。心で馬鹿にしながら……

しかし、今回は様子が違った。藍子は決して諦めなかった。「戦う」とまで言ってくれた。友達と協力して毎朝コスプレで裕人を迎えてくれた。顔を真っ赤にさせて自分の前にあらわれてくれるのだ。きっと恥ずかしいだろう。他の男子に見られてるし、目立った行動をすれば女子の視線だって無視できない。だけど藍子はいつも笑ってくれた。表層的な付き合いで終わらせるつもりだった裕人は少しずつ心惹かれていく自分を感じていた。

さらに宇宙人の入江アンが出現したことにより、チャンスがめぐってきた。この体質の原因は入江アンが行ったものだと言ったからだ。裕人はなるべく入江アンと一緒にいることに決めた。一時的に藍子とは離れることになるが、わかってくれるだろうと考えた。

だが、井端環が裕人の前にあらわれたことで、藍子が傷ついていることを知った。自分が正しいと思っていたことが、何も彼女に伝わらずにいたのだ。考えてみれば当たり前で大丈夫だと自分で勝手に思っていただけなのだ。今すぐ自分の気持ちを伝えようと思った矢先、藍子と喧嘩してしまった。

「やっぱりな」

心の隅に隠れていた自分が這い出るようにこちらへ迫ってきた。

「こんなもんだよ。お前の苦労なんて何もわかってないのさ」

確かにその通りだ。裕人は再び過去の自分と手を繋いだ。

「お前らなんか……消えてしまえ！」

心の中に溜めたしこりが一気に吹き飛ぶ感覚に裕人は笑いがこみ上げてきた。

やっぱり信じなくて良かった！ どうせ僕を助けてくれる人間な

んていないんだ！
だったらもういらねえよ、お前らなんか。

第18話 「恋愛リトルプレイヤー」

環がスマートフォンで時間を確認すると十三時を回っていた。空を見上げると沢山のヘリコプターが飛んでいた。町内の人間が皆押し出されて中に入れないなんて前代未聞の事態だ。ネットや携帯電話などで一気に話は広がっていた。

「まずいな……事が大きくなってる。アンの奴はまだなのか」

「まだ四時間しか経っていないわ。ウイルスの抗体を作るのに短時間でできるわけないでしょ」

自分の弟が原因で騒ぎが大きくなっていることに真理亜は動揺し、いらだっているのが傍目からも伝わってきた。

「真理亜さん、大丈夫だ。立浪裕人が原因だってことはまだ誰も知らない」

環の言葉に真理亜は一瞬ホツとするものの、次の言葉で再び凍りついた。

「だが、夕方になればテリトリーが一時解除される。その時は一気に人がなだれ込み、独りいつ立浪裕人を発見し……」

「あああっ！ 立浪家断絶っ！」

「いや、断絶はしないと思うけどね」

環と真理亜のやり取りを聞いて笑いながらも、藍子は上の空だった。

仮にワクチンができたとしても誰が飲ませるのだろうか？ もし方法があれば自分が行きたいと考えていた。

すると遠くから息を弾ませ駆け寄ってくる女の子の姿が。入江アンだった。

「みなさうん、お待たせしました」

「早っ！」

「遅いぞっ！」

ちなみに「早っ!」と言ったのは真理亜で「遅いぞ!」は環だった。

「とはいえ、できたてホヤホヤだから効き目があるかどうか……」
アンが制服のポケットから取り出したのはカプセル型の錠剤が一つ。

「今は一刻も争う。試験薬で十分だ」

「で? 誰がどうやって裕人のところへ行くの?」

真理亜が尋ねると誰もが黙ったままで答えることができない。

しかし、アンだけが口に手をあて、含み笑いをしている。

「入江アン、もったいぶらずに言え!」

「実はこれを準備してきました」

アンは手に持ってきたランプのような形の器具を取り出した。アンを除く三人は目が点になる。環は眉間にしわを寄せて器具を指差した。

「どう見てもハロゲンランプじゃん」

「はい。地球のホームセンターに売っていたいたものです」

「てめえ、こんなところで光を放つてもしょうがないんだよ」

「わわわっ、ちゃんと聞いてくださいよお」

環とアンのやり取りをみて藍子は「宇宙人が地球人にどやされてる。最初の登場はあんなに凄かったのに……」と思った。

「夕日になればテリトリーが一時的に解除される。最初からこれに目をつけるべきでした。つまり、テリトリーは波長の長い光に弱かったのです」

「た、単純だが、確かにすぐにはわからないかも」

とっさに藍子は裕人が夕焼けの中の川辺で説明してくれたことを思い出した。男の子の言うこともたまには聞いておくべきだなあと反省した。赤みを帯びた波長の長い光りが夕焼けと同じ効果があるという理屈だ。反対に波長の短い光は紫外線になる。

苦々しい表情を浮かべたまま、環はハロゲンランプを持ち上げた。
「波長の長い光の発想でハロゲンランプだと……これじゃあ遠赤外光どころか近赤外光も出ないだろう」

「これが手っ取り早く波長の長い光りを出す装置だったもので……」
「安上がりすぎるだろ！」

「でも改造して威力はマイクロ波並です」

「無駄に凄いな……だがこれでテリトリーは無効化できると」

「おそらくは」

環はアンから錠剤とハロゲンランプを受け取ると藍子の前で立ち止まった。

「よし、藍子。お前が一人で行くんだ」

「でも……」

「お前、夕方になって他の奴らに先を越されたいのか？ もはやプリンセスタイムはお前だけじゃないんだぞ」

「う、うん……」

ハロゲンランプを片手に無人の町内へ向かう女子高生。絵面はこの上なく滑稽だが、思いは真剣だ。

「お前、まさかまだキスのことを気にしているんじゃないだろうな」

「……してないけど」

「十分気にしてるな」

もう考えたってしょうがない。裕人の顔を見れば分かるだろう、と藍子は考えていた。

果たして怒りで殴ってしまうか、泣いて抱きつくか。

どっちにしたってやるしかない。

だって、戦うって決めたんだから。

藍子は決意し、瞳の中に情熱という光彩が灯った。

「いってくるね、タマちゃん」

「おう、行つて来い。なんならその薬を口移して渡してやれ」

「ええええええっ!!」

赤くなつた頬を押さえながら「でもでも」とモジモジしている藍子の背中を環は思いつき叩いた。

「痛いっ!」

「行けよ。キスの恨みはキスで返せ!」

「……うん!」

一歩二歩と歩き始める藍子。振り返って環にピースサインを送る。環も笑いながらピースサインを送り返す。二人の声が重なった。

「「目には目を。キスにはキスを」」

第19話 「テリトリープリンセス」

静かな町内を緊張した面持ちで藍子は進んでいた。足音だけが自分の耳に入ってくる。なんだか寂しい感じ。「誰もいなくなれって思ったらこんな風になるのかな？」藍子は考えた。いくらハロゲンランプで中和しているとはいえ、押し戻される抵抗感は相変わらずで足取りは重い。

歩き始めて数分後、自分の家の前を通り過ぎた。中には入らず、外から仏間の母親に頭を下げた。

生きている人間には伝えなきゃね。それが恨み言であっても、愛の告白であっても。

とにかくやるしかない。藍子は心で何度も自分を励ました。

二十分ほどたったところ、ようやく立浪家が姿を現した。ドアを開け、裕人の名前を呼ぶが返事が返ってこない。呼び出すことを諦めた藍子は真理亜に教わったとおりに二階の一室へ近づく。ドアには「裕人」と名札がかかっていた。

男の子の部屋にも入ったことないのに初めてがこんな泥棒みたいな羽目になるなんて……なんだかちょっと情けない気持ちにもなった。「失礼しまーす」

ドアをゆっくり開けると室内が徐々に見えてくる。ベッド、机、本棚、クローゼット最低限のモノが揃っているシンプルな室内だった。顔だけ室内を覗き込むと、人の気配がしない。もしかして、人が誰もいないから外に出たのかなと考えた時、部屋の奥で物音がした。慌てて音のした方向へ顔を向けると、ベッドの上に大きな塊が見えた。

「誰？」

「君こそ誰？」

ベッドの上の固まりは答えた。藍子が手元にあったスイッチを付けると室内が明るくなり、室内の全容がうかがえた。

「もしかして裕人君？」

「仁村さん……」

塊だと思ったのは布団を被ってうずくまっている裕人の姿だった。
「あ……」 藍子はそのまま一步を踏み出そうとした。しかし、いつもの抵抗感を感じまったく進めなくなった。

「裕人君、ちょっと待って」

「はい？」

藍子は緊急時にもかかわらず携帯電話を取り出し、環に電話をかけた。

「タマちゃん、大変だよ！」

『いきなりどうした？ 立浪裕人とは会えたのか？』

「うん。近くまで来たんだけど、最初に近寄れなかった位置までしかすすめないよお」

『残り三メートル五十センチで止まったか。恐らくアイツの強烈な拒否反応が本来のパーソナルスペース発揮されてトリトリを形成しているんだろうな。言わば立浪裕人の核の部分だな』

「どうしよう……」

『もし近づけたら殴れて指示を出そうとしたが、しょうがない薬を投げて飲んでもらえ』

「うん、残念だけどそうする」

藍子のため息について電話を切ると裕人へと向きなおす。

「裕人君、お待たせ」

「は、はあ……」

毛布を被ったまま裕人は淡々とした口調で藍子へと質問する。

「仁村さん、一体なにしに來たの？」

「あのね……」

藍子はこれまでのいきさつを話した。

「僕が原因で町内の人が押し出されたの？」

「うん。でもね、この薬を飲んだらきっと――」

「嫌だって言ったら？」

裕人は藍子の言葉を遮るように拒否をした。まさか裕人が拒否するとは思っていなかった藍子は口を開いたまま動きを止めた。

裕人は口許が歪んで眉間にシワが寄っている。

「今までは僕が譲歩してきたんだ。次は君たちが遠慮するべきじゃないか」

「裕人君……本気で言ってるの？」

「本気だよ」

「ほら、この薬があれば治るんだよ」

「いらないって言ってるじゃないか！」

裕人は叫ぶとひざを抱え、下を向いた。

「……なんで、なんで僕を好きなんて言っただんだよ！」

「えっ……」

「君が告白して、僕が……僕が好きにならなければ、こんなことにならなかったのに」

「裕人君……」

このままではなにも進まない。

藍子は手を広げ深呼吸を始めた。全てを伝えよう。そんな気持ちになった。

「裕人君は覚えてないかもしれないけど、二年前、私はお母さんが死んじゃったことで落ち込んだの。頻繁に川辺で座ってたそがれちゃって……そんな時、裕人君を見たんだよ」

裕人は下を向いたまま黙って聞いている。

「ちようどさ、裕人君と元カノさんと別れ話をしてるところだった

んだ」

思い出したのか、話を聞いている裕人の肩がわずかに揺れた。

「裕人君の体質も噂で聞いてたし、興味本位で眺めてたの。ぶっちゃけ人が悲しむ姿が見たかったってのもある。自分だけが泣いてるって状況が嫌で、悲しいのは私だけじゃないって気持ちになりたかったのかも。だけど裕人君少しも悲しい顔しないんだよ。理由は分からないけど」

「……ち」

「この人は大切な人に別れを告げられて辛いのかな？ って不思議になったの。んで勝手に結論付けたのが、『きっと今までもっと辛い目に会ってきたからじゃないかな』って思ったの」

「……ちが」

「だって、元カノさんがいなくなってから、裕人君すぐに立ち上がって『やっぱり、こんなものだ』って呟いて笑ったでしょ」

「……違うんだ」

「私には『こんなものだ』って振り切る力がなかったから。もちろん、彼女に振られたことと、母親が死んだことを同一に語っちゃいけないことも知ってる。でもね、私には力強さの象徴に見えたの。大切な人がいない世界でも自分の体質が恵まれないものだとしても『こんなものだ』って思える……開き直りでもいいから進む強さが眩しかった」

「違うんだ！ そんな綺麗なものじゃない！」

「うん。知ってるよ」

「——え？」

「私だって気持ちはドス黒いもん。二年前、タマちゃんに励まされて何度も『お前になんかわかるもんか』って思ったもん」

「仁村さん……」

「ドス黒いままの気持で手を繋いじゃあ駄目なのかな？ 好きにな

「っちゃ駄目なのかな？」

裕人はなにも答えられなかった。自分の考えていたことが、ほとんど彼女に通じていたなんて。しかも、自分と同じだと主張する。

「裕人君。お互い気持を吐き出したところで仕切り直ししない？」

「仕切りなおし？」

「うん。もう一度、告白させて」

「好き」たった一言伝えるだけで、少女にとっては大事件、命懸けだ。十代少女にとっての決闘の場、それが告白現場である。

ここにもう一度告白しようとする女の子が一人。好きな人のドアの向こうから、布団を被ったままの男に対してだった。

「裕人君は夢がありますか？」

「夢？」

「その夢が理不尽な理由で諦めることになっても納得できますか？私はいらない」

抱えた膝越しに裕人は藍子を見つめていた。すでに視線を外すことはできない。瞳の中は彼女以外にも映っていなかった。

「私の夢は裕人君なんです……裕人君といつまでも好きなときに触れ合えること。変ですか？好きな人と一緒にいることが夢なんて間違っていますか？」

「いや……」

「私は夢を諦めません。だからチャレンジするんです」

言い終わった瞬間、部屋の中の音がなくなった。ゆっくりと藍子の口が再び開き、思いを込めた言葉を裕人にぶつけた。

「好きです。本当の恋人になりましたよ」

藍子が一步を踏み出すと、いつの間にか抵抗感はなくなり、足を進めることができた。

近づいてくる藍子に裕人は視線を逸らし、下を向いた。

こんなにもシンプルに自分を受け入れてくれた人が肉親以外にいただろうか。

こんなに不甲斐ない自分の事を夢だと言ってくれる人がいただろうか。

なんなんだよ、どうしてなんだよ、こだわってる自分がバカみたいじゃないか。

ムカつく、悔しい……でもなんなんだよ、この胸がドキドキする感覚は。

胸の奥からこみ上げてくる多幸感を裕人は抑えることができなかった。瞳の奥がじんわりと熱くなり、自然に身体が震えた。

裕人は俯いていた顔を上げる。涙を必死にぬぐいながら彼は答えた。

「うん。なろう、本当の恋人に」

「――裕人君っ！」

藍子は一気に駆け出すと裕人の胸に飛び込んだ。ベッドで二人はもつれ込むように倒れる。息遣いが分かるほどの至近距離に迫っている二人。藍子はゆっくりと裕人の胸元から彼の瞳へと視線を合わせた。瞳の奥からじんわり涙が溢れそうになるのを必死に抑えたが、潤んでいくのを止められなかった。

やがて、二人は近づいていく。藍子の視線の先には裕人の口許しか映っていない。彼女が瞳を閉じると唇がそっと触れた。やや湿った柔らかい生のが感覚が藍子の唇へと広がり伝わる。数秒後、藍子が瞳を開くと裕人の瞳が目の前にあり、少し驚いて唇を離れた。

藍子の上気した頬や鈍く光る唇から視線を潤んだ瞳へと合わせた。裕人はもう彼女からを離せなくなる。

二人の息遣いだけしか聞こえない。藍子は寝転んだまま口許に手を当てて悪戯っ子ぽく笑い、裕人を見つめた。

「キスしちゃったね」

「う、うん……」

藍子はスカートへ手を持っていくと同時に裕人の耳元で呟いた。

「裕人君。女の子の『好き』を侮らないでください」

裕人の瞳が大きく開くと唇を震わせながら「は、はい……」と言
うのが精一杯だった。彼の震える唇を塞ぐように藍子は唇を近づけ
た。

二度目のキス。今度は触れるだけではなく、口を少し開いてお互
いの唇を甘噛みするような形になった。前後に軽く動かすと二人の
粘膜が絡み合い、粘り気のある音を立てた。

裕人は目が細くなりうっとりした瞬間、異物を感じて目を大きく
開いた。

「――っ？」

急いで顔をそらすけど、異物はノドの奥へと進み、ごくりと飲み
込んでしまった。

「な、なにを……」

「ん？　なんだと思う？　それはね……お菓だよ！」

「ええええええええっ！！！」

数秒後、裕人は眠り込んでしまった。入江アンの説明ではウイル
スと戦うため、裕人は数時間眠ることになるということだった。
外では人の声が聞こえた。どうやら夕方になっていたようだ。

藍子は寝息を立てる裕人の頭をそっとなでて呟いた。

「最後にキスは勝つ……だったね」

最終話 「That's all, folks」

向坂高校へ向かう生徒は皆、一様に辛そうな顔をしている。理由は高校の立地条件に由来する。学校自体が山を切り崩して作られているので、校舎までには長く緩やかに続く坂を上らなければいけないのだ。もちろん仁村藍子も例外じゃない……はずだった。

でも、彼女にとってはこの坂は苦にならなかった。それは隣を歩く立浪裕人がいるからである。

「裕人君、今日のお昼休み一組に行ってもいい？ いっしょにお弁当食べよ」

「いや、それだったら僕が三組に行くよ」

「ホントに？じゃあ特等席用意して待っておくね！」

「普通の席でいいよ」

藍子にとってこんな他愛も無い会話ができること自体が幸せだった。なにせ今までは近づくことさえできなかったのだから。

藍子が裕人に薬を飲ませたことで、彼の症状は治まった。さらに関係者が黙っていたことで、町内に起きた事件は原因不明の事件として扱われた。今も世界中の研究者が訪れてフィールドワークしているようだが、なんの手がかりも掴めなかった。

「藍子ちゃん、あの時は本当にありがとう」

「気にしなくてもいいよ。キスもできたし役得、役得♪」

藍子は気になっていることがあった。それは裕人の部屋で告白したと同時に三メートル五十センチ以内に近づけたのは、裕人が心を許してテリトリーに入れたからなのか、夕方が来たからか。今となっては検証しようもない。

だが、町内テリトリー事件以後、裕人は藍子のことを名前で呼ぶようになった。それだけで藍子にとっては心を開いてくれた証拠になったので、一応の結論としている。

「おい、立浪裕人。藍子とくつつきすぎだ！　今すぐ離れろ！　節操を知れ、節操を！」

藍子の隣頭一つ下で環が、抗議の声を上げた。環は事件後、ネット上に嘘の情報を流し、研究者たちをかく乱させてくれた実績を持つ。文句を言う割には結局藍子のためであれば一肌脱いでくれる親友なのだ。

坂を上りきった場所に校門がある。三人が到着すると、大またを開き、腰に手を当てて迎える女子生徒が一人。

「待ってましたよ、環さん。もっと学校のこと、地球のことを教えてください」

「お前は入江アン！　証拠にもなく、まだいたのか！」

入江アンも事件以来、環に怒られたことで、彼女を慕っているのだった。

「お前は星に帰れ！」

「ワクチンはもう送りましたから、私の自由ですよ」

「ぐぬぬぬ……藍子、私は先に行く」

「環さん、待ってくださいよ」

走り去る環においかける入江アン。藍子と裕人は笑いながら見送った。

「んじゃ、僕たちも行こうか」

「うん」

藍子がそっと手を前に出すと、裕人が包み込むように手を握る。暖かくて男らしいごつごつした感触に藍子はドキドキした。

小さく手を振りながら二人は歩き始める。

「ちょっと待ったー！」

藍子と裕人が振り返ると、数人の男子が立っていた。そのなかでリーダー格の男が前に出る。リーダーは彦野悟だった。

「藍子ちゃん！ コスプレはどうしたのさ！」

「えええっと」

「そろそろ、ネコミミよろしく！」

「あわわわ……」

藍子が悟の勢いに押され一歩二歩と後ろに下がると、同時に裕人が彼女の前に出る。

「僕の彼女なんだから、望まないコスプレはさせない」

「裕人君……」

藍子を守ろうとする裕人の背中が一段とたくましく見えた。

彼女は皆に見えないように、そっと裕人の背中へと手を触れさせる。

手の平からは背中の中の温かさと心臓の鼓動を感じられた。

「ふざけんな、みんなの藍子ちゃんに決まってるだろ！」

「行こ、藍子ちゃん」

「うん」

「ちょっと待てよ！」

裕人が走り出して力強く藍子の手を引っ張り走り出した。いつまでも手を握っててくれないかなあと藍子が思う。心地よく手を引かれ、校舎の中へ入っていった。

『テリトリープリンセス』完

最終話 「That's all, folks」 (後書き)

活動報告に「あとがき」を載せました。
よろしければ、お読みください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3168q/>

テリトリープリンセス

2011年4月4日22時55分発行